

次 目

公民教養と菩薩行(中)	本多日生
開目 鈔 講話(承前)	小林一郎
桃太郎と我が國體	岩淵經夫
全國教化大會の記	磯部滿事
君が代の由來と其の意義	和田信二郎
紀元二千六百年頌歌	
靈跡並史跡巡拜即事	金子妙華
記 事	
○本部團報	○故小峰信士を追憶して
○團費誌料寄附金及維持費領收	○立正青年團報
大藏經要義續篇(其二十六)	本多日生

第四十五年十一月一號

統

一

法財人團
統
一團發行

財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ鑿妙會アリ自覺會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進

ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

定ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團畧則

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- 贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- 正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ輸出セラル、方ヲ正團員トス
- 入團 御希聖ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- 誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

公民教養と菩薩行 (中)

本多日生

そこで社會の原理はさうであるが、社會の目的はどうかであるか、是は即ち今の言葉で云ふ共榮でなければならぬ、無論自分も其幸福は受けなければならぬけれども、お互に都合の宜いやうにしなければならぬ、家庭で言ふならば夫婦共に幸福を受けるやうに、夫が妻の犠牲になつて、山の神、奥さんで威張られてしまつて、亭主は尻に敷かれて頭が上らない、今日は一つ演説を聴きたいのだけれども悪いか知らぬ。いけません早く寝んで下さい、さういふことではいかぬ。そこで是れはどうしても双方が人格を尊重仕合せて、双方が公平に其自由を認めて行くといふことが宜い、それは互の爲になることであるからして宜いと思ふ。そこが社會を構成する大事な點である、段々西洋のことなどを聞いて見ると、自由といふことでも自分の要求をして居るのは宵の口で、本當の人の自由を妨げぬやうにならなければならぬ。我に自由を與へよと云ふのは下司下郎が言ふことである、もう少し發達すれば俺は他人の自由を傷けないといふ所に行く、それが紳士である。日本の今日の所謂自由は下司下郎の所を行くので

一點と雖も人の自由は傷けないといふ所に行くのが紳士である。佛教は紳士である、下司下郎の處は始から、通越して居るから、我に自由を與へよといふやうなことは言はぬ、互に自由を尊重して即ち佛教の言葉で言へば恭敬といふことを言ふ、これは人格を認め合ふことでありますが、佛教では「くぎやう」と讀んでをります、「くぎやう」といふことは「きやうけい」といふことである、是れは何にでも使つてある、一切の場合に恭敬を忘れてはいかぬ、恭儉己を持すといふ恭も同じであるが、見ざるを慎み聞かざるを慎むといふので、人の居ない所でも此の恭敬を失はないといふのが佛教である。人は恭敬から離れてはいけない、恭は「うや／＼しい」といふ字で、眞面目に物を敬ふやうな態度である。此の天地の間には何處に行つても其處に佛様も神様も御覽になつて居るからして、決して自墮落なことをしてはいけない、其の神や佛に照らし見られて居るといふ考を本として、さうして互に人々の間にも恭敬を交換する、夫が妻に對しても恭敬を失うてはならない、妻が夫に對しても恭敬を失うてはならないといふことを盛に説いてある、これは頗い程説いてある。それは今の共存共榮といふことを完うして行くには、相互の人格を尊敬し合ふといふことが餘程大事なことであるのである。物質は第二であつて、人を馬鹿にするといふ事程不愉快なことはない、幸福はない。段々やつて行つて御覽なさい、自分が經濟的に都合よく行つて居る、商賣も流行るけれども、親父が少しも人格を認めて呉れぬ、黙つて引込んで居るといふことであれば、食ふには不自由を感じないけれども、あんな解らぬ釜の所に居るとはいやぢ

やといふことになる。親子の間でもさうである、親が何にも心配さぬと言つても息子に對して餘りガミガミ言つて人格を認めないと、私は裸體でも宜い、今までお世話になつたけれども、當分獨立獨歩でやりますといふことになる、一番いけないのは人格を認めずして侮辱するといふことが社會の害毒である。これは必ずしも階級闘争を俟つて言ふことでもなければ、露西亞の革命から起ることでもない、古往今來人間と云ふものは馬鹿にすれば乞食でも物を貰はぬ、足で物を挟んで、さア腹が減つたらう之をやらうと言つたならば、乞食は如何に腹が減つて居つても、いらぬ外で貰ふ、馬鹿にしやがるといふことになる。其の賑恤の場合、佛教でいふと施行を施す場合、此の事の注意が盛に説いてある。物を貰ひに來たからと言つて大きな顔をしてやつては罪惡であるから、どうぞ貰つて戴きたいといふ風にして、自分は少しも侮辱の態度を執つてはならないといふことが、乞食に物をやるのでもさういふ風が能く注意してある。さうして何等其處に求める所があつてはならぬ。だからして無所得といふことを盛に言うて居る。自分に名譽を求めるとか、爲にする所があつては何にもならぬからして、所得無し、我が施は無所得である。何の爲にも前は施して居る。何の爲といふ答辨することは出來ない、唯自分は施がしたいと思つたからするのであつて、其内容は説明は出來ない、どうぞ貰つて行つて呉れたまへ、講釋や文句は言はぬからどうぞ此甘酒を飲んで呉れ給へ、不味けりや吐出して呉れ給へ。施を爲すに就て名譽を求めたり書いて貰ひたかつたりするのではないかぬ、之を唯譯なくお釋迦様が説くのぢやない、社

會を構成して行くには貧乏の者も金持も幸福を同一にしなければならぬから、そこで金持とか身分の高い者が威張るといふことがあつてはいかぬ、平等にやつて行かなければならぬ、そこが大事な所である。

例へば芝居なら芝居を見に行つても一方は自動車待つて居る、一方は風に吹かれて行く、さういふ所でプー／＼やつてはいかぬ、静にやれと言つて其處の所を加減して行くといふことが人生に大事なところである、あの米騒動の時でも名古屋の焼打は、夏の頃であつたさうであります、公園に労働者が涼みに行つて居る所へ自動車に乗つてプー／＼とやつて行く、又後から藝妓を乗せた成金がやつて来た、二三通やられたので行け行けと云ふのでワッと言つてやつた、名古屋のは全く自動車で敵愾心を煽つたから起つたのであつた。さういふことが餘程多いのである、これは昔でも同じことである。さういふ風なことの爲に世の中を毒したことはある、それだから佛様の教によると、そこは佛の前には一切衆生皆平等である、四姓出家して同一沙門と云ふ、四姓出家すれば同一沙門である、四河入海同一鹹味」と言つて居る。四姓といふのは刹帝利、波羅門、嚧舍、首陀。政治家と宗教家と商人と小賣をする所の此の四つの階級がやかましかつた。それは佛様も出家すれば同一沙門であるからといふので頭を取つてしまつた、頭を取つたから日蓮と云ふ、藤原日蓮とも橘日蓮とも言はない、親鸞は親鸞、傳教は傳教、弘法は弘法、皆其姓氏と云ふものを取つて同一沙門といふことを全世界に宣傳して居る、それは

今の人格の平等である、えらいものである。社會の秩序は決して破るものぢやない、人間は智慧が違ふ資産が違ふと言つたからとて、人格を違へて見てはいかぬ。佛様のは何處に差別を置いたかといふと、徳を以て長老と言つて居る、所謂大徳といふものである。人徳を以て尊ぶのであるから、決して人下でもなければ、財力でもなければ、権力でもない。四姓出家同一沙門、さういふ工合に佛様が教へられたのは、非常に社會を共存共榮せしめて相互の安定を得ることにお考になつた。唯だ宜い加減に思ひ付いてやつたものでない、これが爲には非常な苦勞をして居られる、なか／＼えらい苦勞をして居る。それから弟子がこれが爲にはなか／＼難儀して居る、却て差別のある所の平等で行かうとするから反對が起つて居る。阿難尊者の傳などを見ましても、阿難が人を教化する爲に殊更あゝ云ふ梅陀羅といふ非常な身分の低い女からして水を貰ふ、自分で行つて飲んで來れば宜いのだけれども、問題を起す爲に丁度東京でいふと上野の櫻時分に出かけて行つた。梅陀羅といふのは婦人だけれども、特別の卑しい階級に屬する女だといふことを知つて居る、殊に藝者のやうな嫁業をして居つた。それで非常な名高い美人だけれども特別な卑しい階級に屬するものであると云ふ評判である。其評判の女の傍へ阿難尊者が行つて頭を下げた、これはもう下げ方が間違つて居る、阿難は皇族であつて、非常な美男子で、其當時に於てはお釋迦様か阿難かといふ位で女が惚れて困つて居る、非常な好男子である、それが其婦人の傍へ行つたから、大勢見て居た人が阿難があんな所へ行つて何かやるのぢやないか、どうしたのぢやと言つて居

る。阿難は女に向つて水を一杯呉れと言つて其女から茶碗に水を一杯貰つて飲んだ。其時に女が言つて居る、大勢見て居りますから私があなたに水を上げてそれを御飲みになつては大變な問題が起ります。だからあなたは自分で行つて御飲みになつたら宜いでせうと言つた時に、阿難はそんなことはない、何故にお前に水を貰つては悪いか、之を不思議がるのはどういふ譯か、君達之を不思議がるのはどういふ譯かと云うて平等論を盛んにやつて居る、總掛りです。そこへお釋迦様が出て来る譯で、そこで階級差別の撤廢論をやつた。さういふ道德から出て行く思想は非常に私は宜いことと思ふ。之を經濟論からして争闘に導き、さうして破壊運動をやるといふことは間違つて居る。今のやうな場合は矢張公民なら公民といふものはそこを考へて、社會共存共榮の原理原則に基いて、これは何處までも道德的に行かなければならぬ。昔日本に佛教が來た時分でも其事は明になつて居りますからして、聖武天皇の皇后などが矢張人格平等のことをなさつて、病人を看病せらるゝ場合にはどんな下層民の處でも皇后陛下自ら御出でになつて、藥を遣られた。甚だしい話は癩病患者の所へ御出でになつた所が、癩病患者が膿を吸うて呉れと言つたのを忌やがらず御吸ひになつた、御吸ひになつたかと思へば病人ではなくして佛であつたといふ神話になつて居ります。病人が一變して體から光を放つて善哉といふやうなことで、そこまで能く決心したといふやうなことになるので居りますけれども、神秘的な話よりもそれほど皇后自ら賤民の癩病患者でも御世話をなすつたといふ神聖な事實があるのです。これは皆佛教の感化から來て居る。それ

で實際に精神的に佛教の所謂菩薩行の感化を受けて、公民たる者がそれをやつたならば、社會の平和安定は必ず實現されて來るのである、これが一番強い力である。今の恐ろしい思想は猶太民族のあの自尊心が極度に強く、自分のみ選民で、他の人類は完全な人間ではない、過日も其話を聞いたが、何でも向ふの猶太の方では「ゴリ」と云ふ言葉を使つて居る、ゴリといふのは何かといふと豚といふ言葉ださうです、猶太民だけが人間だといふのである、それが爲に基督教が起つて遂に猶太教徒を虐殺するに至つた、何でも烈しい戦が基督降誕後百六十年頃に起つて忽ち二萬人も猶太民族は一時に虐殺されたさうである。其他虐殺虐待といふことは屢あつて、遂に猶太民族は怨を懐いて今日でも禍が残つて居るといふことである。さういふ猶太民族は自分だけえらい、外の者は「ゴリ」だと云ふことを言うて居る。又基督教は博愛平等を言ふけれども、亞米利加人歐羅人だけがえらい人間で、亞細亞人は下等の人間だといふやうな考を持つて居るやうに聞いて居る。此點は歐羅巴人の頭は何と言ふか非常に固陋である。これはどうしても洗禮してやらなければいかぬ。其洗禮はどうしても佛教がやらなければならぬ、お釋迦様は逆もイエスのモーゼといふものとは譯が違ふ、東に出たからお釋迦様だけれども、今に見て御覽なさい、逆もイエスのモーゼなど、云ふ者が傍に寄れる譯のものぢやない、桁が違ふ、萬事が桁が違ふ。そこに今の猶太教にも教ふべき所がある、基督教にも教ふべき所がある。それは眞に人種差別を撤廢して世界の人類の色が違はうが、顔が違はうが平等に視る、大慈大悲の平等の光は佛陀の光であ

る、人は自分の學ぶ所を宜いやうに言ひたがるけれども、吾々は佛教を學ぶから佛教を宜いと言ふのぢやない、眞に釋迦の教は平等である、これは何ぼでも證據はあるけれども、そんなことを證據立てる爲に今日は考へて來て居らぬけれども、一例を申すと、裸行國と云ふのがある、印度だから素ッ裸で暮して居る下等の人間の居る所がある。所が一方は滿富城と云ふ王舍城の近い處に、或る長者の娘がある、須摩提といふ、それを裸行國の國王が貰ひに來た。一方は金持といふけれども普通の家の娘である、一方は裸の國であるけれども王である、其處の世繼の太子が長者の娘が品が宜いから呉れと言つて來た。所が何と言つても野蠻な國であつて素ッ裸で暮して居るやうな處へ娘はやれぬ、殊に裸行國の人は色が黒い、黒ん坊の處へ遣るのはいかぬといふので、親父が娘に相談した所が、娘が私は佛様の御教を奉じ一身の都合は考へて居らない、將來の活動は佛の教に導かれてやる積である、私が裸行國に行つた方が佛の教を弘めるに都合が宜いといふならば私は行きます、ちやんと決心して居る。親爺の方は可愛さうに思ふが娘はそんなことは考へない、私の決心さへ強ければ何もそんなことは心配はない、それではお釋迦様の所へ行つて一つ聽いて見ませう、それから親父が釋尊の所へ參詣して、斯く／＼の譯でありませうが如何致しませうと言つた所が、お釋迦様が娘を嫁にやれ、野蠻國であるし氣に入らぬことはあるけれども、お前の娘はシツカリして居るから、彼れが裸行國に行つたならば教化して立派な文明にする、彼處の者は不惑な者だ可愛想な者だから、お前の娘が行つて文化を開いて如來の教が傳はつたならば如

何に大慈大悲であるか分らぬ、こちらは犠牲であるけれども心は親切だ、彼國の者は、可愛想だ不惑だといふことから考へたら須摩提女は喜んで行くだらうと仰せられた。須摩提女とお釋迦様は意見が一致して居つた、そこで宜しいといふことになつて嫁つた。所が嫁つた時からひどい有様で、波羅門の奴が裸で來て、亂酔した男女が裸踊をして居る所へ嫁さんに挨拶に來いといふことを要求した。須摩提女はそれを斷然跳ね付けた、其様な不作法な處へは斷じて行くことは出來ぬ、人間が裸で踊るといふ不作法なことがあるかと言つて極めつけたから、一方は怒つて、そんな事を言ふなら火を點けて焼いてしまふといふ。御殿は火を付ければ焼ける、何人でも焼くが宜い、如來から教へられた此の須摩提女の頭は下らぬといふ、なか／＼えらいことになつて來た、反抗するけれどもピリッとしもない、段々教化して非常な佛教の感化を與へる。そこには非常に人種の平等の思想が現はれて居る、滿富城であつたから——金持で一番になつて居ると書いてあるから、非常な金持であつて、其中の長者の娘の須摩提女が素ッ裸の國へ嫁に行く。さういふ思想がハッキリ佛教には現はれて居る、これは社會を目的として共存共榮を全うするには、そこから出發せんければいかない譯である。

それから又平素に於て社會を緩和すると云ふか、社會の衝突を成るべく避けるやうに導いて行く手段方法がなければならぬのである。これは矢張主として人格の問題が本であるけれども、それに伴ふものは財産の問題である、第二が財産の問題である。この財産の問題は無論資本勞働の關係も佛様は能く見

てお出でになつて、其利益は決して資本家が占有すべきものではない、其の利益は共報といふ字が使つてある。これは法華部の大薩造經にある。共報——資本の力と勞働の力と合して得たる共同の利益である、故に其利益は資本家が獨り私すべきぢやない、共報のものど心得なければならぬ。それから施行を力説するのでありますが、これは一通りでない、施を奨励したことは實に細密に亘つて居る、如何なる者でも施をせぬやうな者は人間でないといふことを徹底的に説いてある。施を徹底的に説いたから貧女の一燈といふやうなことが起つて來た。貧女は自分に一物も無い、何にも無くても施をせい、何にもなくともやれといふから自分の頭の髪の毛を切つた、女は如何に何んでも髪の毛は大切である、女が髪を切るのは男が腕を切るやうなものである、それを切つて僅な錢に換へて油を買つて施した、貧女の一燈長者の萬燈といふ所以はこれである。萬燈々々といふのはあんな物ぢやといふことになつて居る、萬燈でなし、我輩のは一燈ぢやと云ふ、あゝ云ふ風な觀念が佛教の方では非常に強い。それだから施といふことは社會を緩和する所以である、少し財産の有る者は無論施行をやるべきもので、佛教に歸依して信仰を決めた日から施は附物である、第一信仰と施はちやんと附いて居るのである、信心したと言つて空手で信心したといふことは許さぬ、信心したといふ印は何であるか、施行である。それが相當な理想的なものである、今のやうに誰でも彼でも、左様ですか饅頭にしませうか硬飯を竹の皮に包んでやりませうかといふやうなことを言つて居らぬ、施行費は自分の分限に應じて案出してあゝしやう斯うしやうと

云ふことが理想的になつて居る。今のは嫌や／＼ながらやるから誰でも竹の皮に包んで澤庵二切といふことになつてしまふけれども、さういふものぢやない、もつとあれを精神的に理想的にする、施をせぬ者はひどい目に會ふと云ふので施餓鬼といふものがお盆にある、あれは施をせなかつた光景をやるのである。是れは即ち目連尊者のお母さんが金持であつたけれども青提女といふのは自分の子ばかり可愛がつて施をせなかつたから、腹ばかり膨らんで咽喉が塞がつて水を飲むことも出來ない、目連尊者が悟を開いて天眼を得て居つたから、如何にも可愛さうだやといふので、水を持つて行つても火が燃えて咽喉に入らぬ、お釋尊さまの處へ來て相談すると、それは施をしなかつたから罰が當つたのである、一通りの方法では救済の途はないといふことである。それではどう致しませうといふ、それでは檀那寺の和尚だけではいかぬから僧侶全部に供養せよ、それには一軒一軒持つて廻つてもいかなから僧自恣の日と云つて七月十五日は坊さんが勝手に遊びに出ることの出來る日である、佛陀の制法では今のやうに一人勝手に遊びに出ることは出來ぬ。新兵に古參兵が附かなければ出られないやうに、長老が附かなければ出られない。然るに七月十五日は勝手に歩ける、其時に十字街頭で壇を設けて僧侶に御馳走する、どうか母に一逼の御回向をお頼み申す、色々山海の珍味を十分設けて、生れて始めてだといふやうな御馳走をすれば喜んで回向するだらう、不味い物では逆も助からぬ、そこで種々な馳走をして僧侶に回向を頼む、あれが施をせなかつた報である、澤山それがある、それから盂蘭盆會といふやうなことでも、惡倒とい

うて逆さにつらされて虐められて居る。それから慳貪邪慳と云つて『しわんぼう』——慳貪——これが一番えらい罪になつて居る、それは何かといふと施行の反對である、しわん坊は掻込む方は幾らでも掻込むけれども、出す方は袖から手も出さぬといふのである、これは或る時代には非常に悪口を言うて居つた。そんな手緩いことではいかぬ、金持からは相続税を目的玉が飛出る程取つてやるとか、特別税をかけてやるとか言つて居る。それも悪くもなからうけれども、幾らさういふことをしても矢張世の中は平和にいかない。これは商業上に於て成功した者は自由意思によつて施をするといふことを尊ばなければならぬ、法律で取られることになつて居るから自分はせぬといふことは面白くないと思ふ。三菱でも三井でも久原でも金持になつて居る者は施行をやらなければならぬ。吾々は嚴るとは言はぬけれども、死ねば餓鬼道に落ちることは極まつて居る。そこは大事な事である、これは非常に大事な事である。それで施を受けた者は之を又有難く受けて行くといふやうに社會を緩和すべきである。

さういふことが澤山の箇條に分れて教といふものを成して來る、それを一貫する大事な點が菩薩精神といふものであらうと思ふ。それ故に公民教養は社會構成の原理を相互扶助に置き、其の目的を共存共榮に置いて、其の間には人格の平等と成るべく貧富の懸隔を緩和すべく施行喜捨といふやうな事を以て進んで行くやうに教へなければならぬ。それを一貫して行く精神が菩薩行の中に現はれて居る。

開目鈔講話 (承前)

小林一郎

周の第四昭王の御宇二十四年甲寅四月八日の夜中に天に、五色の光氣南北に亘て晝の如し、大地六種に震動し、雨ふらずして江河井池の水まさり。一切の草木に花さき菓なりたりけり。不思議なりし事なり。昭王大に驚き、大史蘇由占て云、西方に聖人生れたり。昭王問て云、此國

いかん。答て云、事なし。一千年の後に彼聖言此國に渡つて衆生を利すべし。彼の僅の外典の一毫未斷見思の者然ども一千

年のことをしる。はたして佛教一千百十五年と申せし、後漢の第二明帝の永平十年丁卯の年、佛法漢土に渡る、此は似るべくもなき、釋迦多寶十方分身の佛の御前の諸菩薩の未來記也。當世日本國に、三類の法華經の敵人なかるべしや。

支那に佛教が弘まる前にその前兆があつたといふことがある。周の第四代の昭王といふ王様の御宇の二十四年の四月八日の夜中に、天に五色の光が南北に亘つてまるで晝のやうである。大地が六種に震動

し、雨が降らないのに大きな河でも小さい川でも、井戸の水でも池の水でも一パイになり、一切の草木の花が咲いて、木の實がなつた。實に不思議な事である。そこで昭王が大に驚いて、大史蘇由といふものを呼んで、「これは實に不思議な事だが、どうして、こんな變つた事が出来たか、これを占つて見て呉れ、何の前兆だらう」と仰しやつて占はしたところ、蘇由が占つて言ふには「これは西の方の國に非常に勝れた人が生れるといふ前兆として斯ういふ變つた事があつたのだと思はれます」斯う申し上げた。昭王が言ふには、それは西の方にさういふ勝れた人が生れてその結果、この支那の自分の國にどんな影響があるのだらうか。そこで蘇由が答へて言ふには、今は別にどういふ事もない、併し今から一千年の後になつたならば、その勝れた人の説いた言葉がこの國に渡つて、大勢の人に利益を與へるでありませうと申し上げた。これはつまり佛様の事を申し

勢の菩薩が未來を察して説いたことであるから、この法華經勸持品の中にあるところの豫言が中らない筈はない。當世日本國に三類の法華經の敵が無い筈はない。

されば佛付法藏經等に記して云、我滅後に正法一千年が間、我正法を弘むべき人二十四人、次第に相續すべし。迦葉、阿難等はさてをきぬ。一百年の脇比丘。六百年の馬鳴、七百年の龍樹菩薩等、一分も違はず既に出給ひぬ、此事何かんがむなしかるべき、此事相違せば一經皆相違すべし。所謂舍利弗が未來の華光如來、迦葉の光明如來も皆妄語となるべし。爾前返て一定となつて、永不成佛の諸聲聞なり。大野干をば供養すとも、阿難等をば

て居るのであります。斯ういふ話がある。この蘇由といふのは別に佛敎を研究したものではない、外典即ち佛敎以外の學問の一部分を研究したのでありますから、「未斷見思」といつて、未斷見思の迷ひといふのは凡夫の迷ひです。まだ佛敎を學ぶことが出来なから凡夫の迷ひを除き去ることも出来ないくらのものであつた。けれども兎に角立派な學者で、心持も名譽心も利益心も有つて居ないさういふ純一な眞面目な心持を以て未來の事を考へて、一千年後の事まで、ズツと知つて居るのである。果して佛敎がそれから一千百十五年經つて後漢の第二明帝の時の永平十年に支那に渡つた。さういふ譯で、人間が心の迷ひを除いて來れば、未來の未來までもスツカリ見透しが付くといふことは當然のことである。況してこの法華經の中の豫言といふものはそんなもの比べることの出来ないくらゐの、お釋迦様と多寶如來と十方の佛様とが皆お集りになつたその前で、大

供養すべからずとなん。いかんがせんい
かんがせん。

佛様は付法藏といふお經をお説きになつて、その中に、これから後にだん／＼と佛の尊い敎を弘める人が續いて出るだらうと言つて居らつしやる。自分が減くなつた後の一千年の間には、我が正法を弘むべき者が二十四人出るといふことを言つて居らつしやる。さうしてその中の迦葉とか阿難とかいふやうな人は、これはお釋迦様の生きて居られる時の直ぐのお弟子だからこれは別に置いて置いて、百年經つて誰か勝れた人が出るだらうと豫言して居らつしやつたら、果して脇比丘といふものが出た。又六百年經つて非常に勝れた人が出るだらうと豫言して居らつしやつたところが、馬鳴といふ人が出た。七百年經つと勝れた人が出るだらうと言つて居らつしやつたら龍樹菩薩が出た。チツトモ違はずに出た。これは佛様の智慧で以て末の世の事を見透されたのだから

別に不思議はない。

若しさういふことが違ふならば、一つの經が皆當てにならぬことになる。舍利弗が未來の華光如來になるとか、迦葉が未來の光明如來になるといふことをお釋迦様が仰しやつたが、さういふ事も皆嘘になつてしまふ。さうして法華經以前の方便の教の方が眞實の教となつて、法華以前の經に於て、聲聞といふ小乗の教を聽いた者は佛に成らぬと決められた者が結局佛に成つて、佛に成るべき人が佛に成らないといふことになるであらう。

この佛の言葉が外れるか外れないかといふ問題に就ては、前にも一度申したことがあります、今ここでモウ一度繰返して注意して置きたいと思ふ。日蓮上人が叡山で三十二歳まで研究をなされた結果、法華經といふものが末の世に於て弘まるものだといふことは明かである。その法華經の弘まる時は末法の世と言つて、世の中が混亂してモウ手の附けられ

思ひ立たれたことは、自分の態度一つで佛のお言葉が嘘にもなれば嘘にもならないのだ、斯ういふことであります。何故ならば日本國中に法華經が一番勝れたものだといふことを知つて居る者は無かつたのだから、自分が茲で命に懸けてこの教を弘めて、この教が弘まれば佛の豫言が事實に現れるだらう、今自分が茲でぐづ／＼してこの教を弘めなければ、自分以外に法華經を弘める者は無いのだから、佛のお言葉が嘘になつてしまふ。佛の仰しやつた事が嘘か嘘でないか、そんな無責任な詮索をして居てはならない、佛を嘘つきにしたくなければ命懸けて法華經を弘める外ない、斯う思ひ定められたのが、日蓮上人の法華經の行者として立つ最後の決心だと言はれて居りますが、吾々が世の中に處する途もこれで行けばならぬ。誰か何とかして呉れるだらうと言つても、誰も出て來ない、いけないと思つたら自分で良い途を拓くが宜い、佛が嘘つきになるかならない

ないやうになる時だといふことも明かである。そこで日蓮上人が考へた。このお釋迦様の仰しやつたところが本當に事實に現れるかどうか、今の世の中を見ると如何にも末法の世の中だ、淺ましい世の中だ、法華經といふものが今日本にある、世の中は淺ましい世の中だが、法華經といふものが今までありながら、今までも寺の庫に納はれてあつて、誰も見る者もなければ讀む者もない、佛様の仰しやつたことは法華經は末法の世の中に弘まると豫言されたこの言葉が嘘になるならば、他の佛のお言葉も又嘘だといふ疑ひを有つ者が出來て來て、佛の教といふものは全く世の中に弘まらなくなる。併し世の中を見ると誰も法華經を弘めて居る者はない。どうしたのだらう。佛のお言葉は嘘だらうか、嘘でないだらうか、斯ういふ疑ひを懷いて、随分煩悶苦悶された様子であります。その時にいろ／＼煩悶し苦悶された結果

かといふやうなことを詮索して居ないで、佛様の仰しやつた事が嘘になると思つたら、佛様を嘘つきにしないやうに、自分で奮發して働いたら宜い譯であります。そこが所謂菩薩の心持といふのであります。自分が手を拱いて見て居つても、いつ迄経つても出て來ない。今の世の中でもさうだらうと思ひます。どうもこんな世の中になつて仕様がなない、誰か相當な人が出て來さうなものだと言つて、いつ迄待つても天からも降つて來なければ地からも湧いて來ないから、これではならぬと思つた人が自ら進んで奮つてやるといふだけの決心をしなければならぬ。斯ういふ事を申しますと、大變空想を言ふやうで、なんだお前のやうな者が一人で天下を救ふとか、國家を救ふとか言つても、そんな事は出來まいと言ふかも知れぬが、斯う考へたらどうでありますか。茲に大勢の人が集まつたとして、これは夥しい數であります、他方の一人の人は仲間はいない數であ

りますが、併ながらその大勢の者は、大勢集まつたやうだけれども、直ぐに消えてしまふ、ちやうど夕立の後で道路が濡れたやうなもので、直ぐに乾いてしまふ。たゞ一人でも、その人が眞面目な者で、又一人を生み、その人が又一人を生み、断えず生むならば、これは一人が一人では終らないでせう、往來に一パイになつた水は盛なやうだが、直ぐ乾いてしまふ、谷底から滾々と湧く水は小さき流れのやうだけれども、年中湧いて居るから、その水といふものは涸れはしない。それだから天下を救ふとか、大勢の人を救ふとかいふ横幅の廣い事ばかりではならぬ、一人が一人を生み、又一人を生み、さうしてだんだん仲間を作つて大勢にして行つたら、これは大變大きなものになる。そこを考へなければいけないと思ふ。

日蓮上人がその事を言つて居らつしやる、
日蓮一人南無妙法蓮華經を唱へば二人三人五

はいけない。自ら進んで教を弘めれば、その弘めた事が本になつてその教を少しでも信ずる者が世の中に出て來て來る、さうすれば佛の仰しやつたことは妄語とならない、「いかんがせん、いかんがせん」どうしたものだらう、これはこの儘捨て、置いてはいけない、「いかんがせん」といふのは自分を勵まして居る、どうしたものだらう、この儘捨て、置いてはいけない、くづ／＼して居ると佛様の仰しやつたことは嘘になるのだから、たゞいゝ加減な事をして居てはいけない、本當に力を盡して一人でも二人でも三人でも、同じ決心の者を作らなければならぬといふことを言はれるのであります。

これで一段落致しまして、今度は法華經勸持品の中に三類の強敵というて三つを算へ上げられて居る、その三つの關係を今度は説いて行かれるのであります。

一八
人十人百人千人とやがて日本國一同に南無妙法蓮華經を唱ふべし
今直ぐぢやない、今大騒ぎをして大勢の人を集めて景氣好くやつても、直ぐ消えてしまふ。天下を救ふ救ふと聲を大にして、たゞ一時お祭り騒ぎをやつても直ぐ消えてしまふ。縦し自分は家に引込んで居ても、一人でも宜い、同じ心持の人を作つて、同じ心持の人の心が照し合つてしつかりして居たならば、決して一人は一人ではない、その一人の力といふものは大きなものでありませう。

その事を日蓮上人は屢々言つて居らつしやる、だから自ら奮つて立つといふことは決してお祭り騒ぎをするとか世の中を騒がすといふことではない、そこは間違ひないやうにありたいと思ひます。併ながらさういふやうに自ら責を負うて立つといふだけの考は執らなければならぬ。だから佛様が嘘つきになるかならないかといふやうなことを議論して居て

の惡世中比丘と、第三の納衣の比丘の大檀那等と見へたり。

その三類の強敵は

- 一、俗家増上慢
- 二、道門増上慢
- 三、僭聖増上慢

でありませう。第一は俗家増上慢、即ち吾々のやうに出家しない俗人であつて、佛教の極く浅い所だけを習つて、自分がそれで解つたつもりになつて、さうして法華經を弘める人を敵として憎む者。第二は道門増上慢、出家の人であります、寺に住んで居る坊さんで、念佛とか禪とか、その他モツと低い教もありませうが、それ等の低い教を學んで、さうして法華經の弘まる妨げをする者。第三は僭聖増上慢、僭聖といふのは世間から大變勝れた人だと言はれて自惚れて、自分が勝れた者のやうな氣になつて居つて法華經の弘まる妨げをする者。第一の諸の無智の

人有り」と勸持品の中に書いてある。それが今言つた俗衆増上慢で、世間の佛教を信じて居る者で眞實の事が解らない者を言ふ。それから「第二の惡世の中の比丘」といふのは道門増上慢の事を言つて居る。「第三の納衣の比丘」は極く汚ない着物を着て貧しい生活をしながら、それに満足して居るやうに見えて、世間から名譽心もなければ欲もない者だと崇められて居るやうな人、これが第三の僭聖増上慢であります。

その第一の俗衆増上慢といふものが第二第三のつまり出家の人の大檀那、保護者となつて、さうしてこの出家の人を援けて、法華經の行者に迫害を加へんとする。

これはマアいつの時代でもさうであります。正しい教を説く人は佛様のお心持を自分の心持として居るから、この教の力で以て人を教化することが出来るといふ自信を有つて居る。だから無暗に世の中の

華經の教を信じて呉れればそれは結構であります。勢力のある人が一人信すれば、その力に依つて他の人は信するやうになるから、これは結構であります。

併ながらそこは考へものであります。涅槃經の中には末の世に至つてこの教を弘めることを國王大臣等に付囑するところがある。お釋迦様はさう仰しやつて居る、國王大臣といふやうな世の中の勢力のある者に頼むぞ、何故ならば、一國の王といふものは相當に勢力のある、相當の深い威化の力の多い者ばかりがなつて居るのだから、國王大臣に頼むぞと斯う仰しやつてある。ところが法華經の安樂行品の中には自ら進んで國王や地位の有る者に會ふなと言つてある。同じ佛様の仰しやつた事が、まるで矛盾して居る。一方には國王大臣に頼むぞと言つて、他方にそんな者に會ふなと言つてある。これは面白い事でありませう。これは心の問題であります。國王大臣等を

勢力のある人に結構かない。それ故に相當の勢力のある人が歸依すれば格別だけれども、無暗に結構かぬで宜しい。これは佛様のお心持に叶つた教ナンだから、今行はれなくてもキツと後で行はれるに違ひない。佛様の教が行はれないやうなそんな世の中ではないから、今は兎に角、後の時代に行はれる。斯ういふ自信を有つて居るから、その正しい教を説く人は正しい教を説くので以てそれで宜いとして居る。ところが間違つた教を説いて居る者は何だか心許ないから、そこで世間の地位勢力有る人に結構い、その力を借りて自分の派を弘めようとする、又その力を借りて自分の反對者に迫害を加へようとする。これはいつの場合でもさうでありませう。といつて拗くれるには及ばない、ナニ金のある奴は皆駄目だ、地位のあるのは皆駄目だと、そんなに拗くれるには及ばない。金のある人はある人で結構だ、地位のある人はある人で結構だ。その人が本當に法

誠心を以て教へ導いて、正しい教に歸依せしめるといふことは、これは結構であります。併ながら教を説く人が自分の地位を作らう、自分の宗派の勢力を作らう、自分の生活を良くしようといふ考で、私心の心持を以て、世の中の地位あり、勢力ある者に結構いいて妥協してはならぬ。この心の持ち方でありませう。

それを二つに説き分けてある、どつちも大事な事でありませう。自分といふものがそこに入つたならば、それはまるで駄目になる、自分の勢力を作らう、自分の地位を作らう、自分の宗派の光を増さう。さういふことで小さい煩惱を中心として、地位あり勢力ある人に結構かといふことであつては、到底本當の佛の教といふものは世の中に弘まるものではない。だからその事を厳しく諷めて居る、國王大臣等に頼むと言はれると同時に、併ながら國王大臣の力を借りる場合には自分の私といふものは捨てな

ければいけない。その地位あり勢力ある人を侍んで自分の方の繁昌を圖るといふことは斷じていけないといふことを諷めて居るのであります。

吾々が物事をするのはそれでなければいけない。拗くれて、世の中を香中にして自分一人でやらうといふ考を起すには及ばないではないか、併し己れを枉げて、私の主張を枉げて地位や勢力に結付くといふとその一宗一派が本當に腐つてしまふからそこは能く氣を附けなければならぬでせう。斯ういふ事は能く所々に言つてあります。うつかりするとそこは矛盾した言葉のやうに見えますが、決してこれは矛盾はない、佛の御精神といふものは始終一貫して居るもので、その趣意を能く辨へるやうにしたいものだと思ひます。

これは日蓮上人の態度を見れば能く解ります。日蓮上人は北條執權に對して始終要求して居られる、方々の各宗の坊さんを集めて自分と問答をさして呉ますから、その勢力に依つて教を弘めるといふことが國の爲であり、佛教の爲であるといふので決心をされたのであります。

一方日蓮上人が佐渡から赦されて歸つて來た時に、平ノ左衛門が日蓮上人に申した「お前は永い間苦勞したから、鎌倉に葉着いたらどうだ、鎌倉には堂を建てて土地を寄附してやらう、その代り法華經の弘め方を少々穩にして戴きたい」と言つた。併し日蓮上人は撥ねつけて身延にお入りになつた。これは大事な事でありませう。自分の主義主張を枉げても世の中の勢力を頼むといふことはならぬ、教の根本が腐つてしまふ。さういふ事はしない、そこは能く解つて居ります、本當に明かであります。自分の主張を枉げてはいけない、自分の信仰を枉げてはいけない。これが根本であります、つまりその根本を枉げてどんなに勢力が集り、どんなに助けが來ても何にもならぬ。その主義主張を枉げない範圍に於て

れ、自分はナニモ法華經が良いものだからと言つて、がむしやらに法華經を貫くものではない、自分は法華經を良いと信じて居る、向ふは念佛が良い、禪が良い、眞言が良いと信じて居る。だから互が遠くで以てさういふ事を言つて居つても仕様がなから、北條執權の力で以て大勢の人を集めて、公衆の前で自分と諸宗の者と問答して、さうして果してどちらの宗旨が正しいか、これを決めようぢやないか。斯ういふ事を言つて居られる、これは實に公明正大である、さういふ時には地位あり勢力ある人の力を頼む、自分だけでは出來ないから……天台大師も傳教大師も皆帝王の力を借りてさういふ事をされたのだから、日蓮上人もこれに倣つて、自分と諸宗の者と問答しようといふ時には、帝王の力を頼む、その事を頼む爲に態々前執權である北條時頼に立正安國論を出されるとかして、始終その事を催促して居られる。それは確に世の中に勢力のある人であり

地位あり勢力ある者の助けを求めるといふことは結構であります、これは大事な事で、そこは間違へてはいけない。お釋迦様は、國王大臣に頼むと言つてあるから、何でもやつて宜い……といふやうなことでやるのはそれはいけないのであります、そんな事でどうして本當の事が出来るものでありませう。その所は餘程しつかりとしなければならぬ、日蓮上人の態度は實に明白であります。又お釋迦様のお説きになる事もチョット矛盾して居るやうでありますけれども、その深い意味を能く明かにして見ますと實にハッキリするのであります。それで吾々はさういふやうなことに就て能く問題が起つて參りますから、そこを注意して置きます。

今こゝでもそれを言つて居る、末の世になると、出家の人が今の道門増上慢、偕聖増上慢といつて、表面は清淨な行ひをして居るやうに見えるけれども、心に煩惱があつて、佛の教を本當に辨へない者

が自分達の力ではいけないからと言つて、第一に無智の人、即ち俗衆増上慢、世間的に相當の地位あり勢力ある法華經を嫌ふ者を頼んで、さうしてその人々を保護して、又保護する代りにその人の助力を受けて、さうして力を集めて正しい教に迫害をする者と思はれる。

隨て妙樂大師の俗衆等云々。東春に云、公處に向ふ等云々。第二の法華經の怨敵は經に云く、惡世中の比丘は邪智にして心諂曲に、未得ざるを爲得たりと謂、我慢の心充慢せん等云云。涅槃經に云、是時に當に諸の惡比丘あるべし。乃至是諸の惡人復是の如き經典を讀誦すと雖も、如來深密の要義を滅除せん等云云。止觀に云、若信無きは高く聖境に推して己が智分に非とす。若智無きは増上慢を起し

二四
己れ佛に均しと謂ふ等云云。

そこで妙樂大師は俗衆といふものが法華經を弘める者に害を加へると言つてある。又東春即ち智度といふ坊さんは「公處に向ふ」と言つてある、公處といふのは地位あり身分ある人の家、さういふ人の家に入出して、地位あり身分ある人の助力を頼んで法華經の行者に迫害をしようと云つてある。それから第二の道門増上慢、出家の人で法華經の弘まる妨げをする者、それは法華經の中に「惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に、未だ得ざるを爲得たりと謂、我慢の心充慢せん」とある。だん／＼世が末になつて來ると、智慧を磨いても正しい智慧が無くなつてしまつて、心の曲つた信仰が多くなつて來る。さうすると「未だ得ざるを爲得たりと謂、自分は佛のお心持は本當に解らないのだけれども、少しばかり經を讀んで一部分學んでモウそれでスツカリ解つたやうな心持になつて、さうして我慢の心が満ちて、モ

ウこれ澤山だ、斯う思つて居る。我慢の心が満ちたら何故法華經の行者の邪魔をするか。そこは實に面白い、人間といふものは自分の事は何處か解つて居る、だから一方に於ては俺は偉いと思つて居るけれども、併し何だか斯う淋しい、やはり何處かしら人の勝れた所は解つて居る。それだから自分が勢力があつても、例へば日蓮上人などはたゞの青坊主で、地位もなく勢力もなく、何もないのだが、これが何だか恐しい、どうも相手から言ふと何だか薄氣味が悪いといふのは、やはり人間の本心がある、所謂佛性があるのであります。それだから威張つて居りながらやはり何か迫害を加へたくなる、本當に偉ければ相手にしなければ宜いが、相手にせず居られない。やはり自分に引け目を感じて居るのであります。だからあんな奴は相手にならぬと言ふのは、怖いから相手にならぬと言ふ、實際相手にならぬなら黙つて居れば宜いのであります、ナーニあ

んな奴はと言ひながら、やはり何だか怖いからこれに迫害を加へるといふことになつてしまふのでありませう。我慢の心がありながら臆病未練の心持が心の何處かの奥にある。さういふ者が法華經の行者に對して迫害を加へるやうになるのであります。

そこで涅槃經の中にその末法の世に至つて正しい教を説かない人の事を説明して「是の時に當に諸の惡比丘あるべし、又「是の諸の惡人復是の如き經典を讀誦すと雖も、如來深密の要義を滅除せん云云」とある。これは適切なことでありませう。「是の如き經典」といふのは法華經とか涅槃經とかいふやうな大乘の經典、これを讀むことは非常に讀むけれども、それを讀んだら人に説明する時に、佛の奥深い意味を取つてしまつて、違つた意味にして説明して居る。甚だ露骨な事を言ふやうだが、今世の中に於て法華經を弘める人は大多數がそれでありませう。法華經を説明して、法華經を信すれば病氣が愈るとか、

金が儲かるとか言つて居るが、まるで佛の本當の意義を取違へて居る。口では法華經を讀んで居るけれども、精神に於ては全然駄目である、一體佛の教といふものは人間の煩惱を除くことを主にしなければならぬのに、それを人間の心の煩惱を煽るやうなことをやつて、儲かるぞとか御利益があるぞと言つて居るのは、これは涅槃經にある通りであります、チツトも違はない、それは法華經を侮るものであり、經を侮辱するものである。さういふものが、本當の謗法罪といふものであります。法華經が悪い〜と言ふばかりが謗法罪でない、『法華經は有難いお經だから信じなさい、儲かるぞと言ふ、それが本當の謗法罪、法を汚すことこれより甚しいものはない、だから涅槃經にその事を諷しめて居る、折角良いお經を讀んで居るけれども、まるで意味を喪つてしまつて讀んで居る。それは實に『惡比丘』惡人だと言つて居ります。これは實際惡人であつて、法を汚し、

教を傷ける惡人だと言はざるを得ない。勿論それは前にも言つたやうに、信心をして、信心の結果商賣が繁昌する、信心の結果役が上る、信心の結果事業が盛になるといふことは決して否定しませぬ。それはその人の信心することに依つて自分が生れ更つたからでせう、信心して今までの懶け者が働き者になり、信心をして、今までの嘘つきが正直者になるから商賣が繁昌するし、役も上るでせう。それを自分の心が煩惱に満ちた本の儘にして置いて、たゞ口先だけでお經を讀む者は謗法罪であり、法を汚すものだと言はなければならぬ。それを涅槃經の中に諷しめて居る。斯ういふ尊い經を讀みながら、佛様の教の深い意味を皆無くして居るぢやないか、さうしてつまらないものにして世に弘めて居る、斯ういふものは兎に角佛の敵だ、これは惡人だ。斯ういふ事を言つてあるのであります。如何にも適切な事であります。

それだからどうも天台大師の摩訶止觀の中に言はれる、どうも後の世中が惡くなると、二類あつて、一方の方は信仰が無い、信仰の無い者はどうするかといふと『高く聖境に推して己が智分に非とす』難かしい事はこれは特別の偉い人がやることで、自分達のやることではない、吾々は病氣を癒すぐらゐで澤山だ、斯う決めてしまふが、本當に法華經の信仰があるならば佛の仰しやつた事を信じなければならぬ。佛はお前達は皆佛に成れるぞと仰しやつたのに、それを信じないから、難かしいから自分には出ない、マア〜誰か偉い人はおやりなさい。自分は病氣が癒るくらゐで宜しいとなつてしまふ。謙遜したやうだけれども、謙遜ではありはしない、自ら信じ、又佛のお言葉を疑はないやうにしなければならぬ。佛様はお前達法華經を信じさへすればどんな事でも出来るぞと仰しやつてある。それを疑つて、さうして逆も自分達は駄目だ、斯う思つてしまふと

いふのは信の無い證據であります。又一方には智慧の無い者は自分で自分の事が解らないから、少しばかり佛教の言葉などを覚えて、人は下等だと言つて増上慢を起す。『ア、俺もこの頃大分偉くなつた、大に覺つた』と言つても少しも覺つては居ない。智慧が足りない、自分で自分を見る力が無い。だから兩方になつてしまふ、一方は逆も駄目だと言つて少しも眞實の修行をしない、一方は少しばかり道理が解つたと言つて直ぐ自惚れてしまつて『俺も大分近頃は……』と言つて居る、この二類あつて困る。どつちも本當の信心ではないぞといふことを止觀の中に言つてあります、如何にもその通りであります。マア今の世の中でも動もするとさうであります。努力を吝しむ、そんな事は偉い人がやつたら宜い、自分達は解らないと言ふ。一方に於ては少しばかり解ると威張つてしまふ。『ナニニ世間の俗物は相手にならぬ』と言つて居る。どつちにか

偏るのであつて、一方は信仰の無い者、一方は智慧の足りない者。斯ういふ弊害を避けなければならぬといふことが言つてありますが、如何にも尤もであります。

これは日蓮上人當時の、鎌倉のいろ／＼な人に對する非難でありますけれども、世が幾ら變り、代が幾ら遷り變つても人の心に違ひはないのでありますから、吾々はどうか信無き者、智無き者のどつちかに偏らないやうに、氣を附けなければならぬと思ひます。信が有るならば、佛のお言葉を信じて、自分が飽迄も修行を勵むべきであります。智が有るならば己れを振返つて見て自分の足りない事を明かに見て掛るべきであります。信が無いから勇氣が無くなり、智が無いから自惚れるといふ、この事を天台が能くハツキリと言つて居るのであります、吾々に對する訓戒と致して如何にも適切なるものであるやうに思はれるのであります。(第三十六講了)



桃太郎と我が國體

陸軍中佐 岩 淵 經 夫

一、緒 言

私は只今御紹介を戴きました岩淵でございます。私は「桃太郎と我が國體」といふ題の下に、桃太郎の事は我が國體をよく説明して居るといふことを申上げて見たいと思ひます。現下世界の大轉換期に直面し、我が國は國內に新體制を確立し緊國の理想に向つて一大飛躍を爲さんとするに方り、桃太郎は吾々に大いに教ゆる處があるのであります。

二、桃太郎の事は吾々に何を訓へてゐるか

桃太郎の事は日本五大伽那の一で國民童話中の最も代表的なものであつて、我國民の間に次々と語り傳へられて永遠に絶えることのない生命のある物語であります。新しく國民一般に持て囃される所以のものは日本人の氣持をよく言ひ表はし

て居るからであると思ひます。随つてこの事は日本の國の心を言ひ表はして居るとも謂ひ得るのであります。

一體桃太郎の話は吾々に何を訓へたものかといふことは面白い研究問題であります。この物語の成立や作者に就いては種々の説があり、定かには分りませんが佛敎發達の副産物として現はれたものであることだけは肯定し得られます。然し時代思潮の變遷と共に漸次發展してゐるのであります。日本が桃源の夢から醒めて開國進取の國是を取るに至つて、海國男子の海外雄飛を訓へたものと解釋して書かれた時代もあります。又國民自治政治の強調せられた時は自治を教へたものと説くものもありました。

第一次歐州大戰の後には、平和熱が高くなり、童話作家の沖野岩三郎などいふ平和論者は桃太郎の話は、軍國主義を鼓吹

するものである、であるから純眞なる子供に教へることは適當でないといふに至つた。自由主義の瀰漫するに及んで、帝國主義的に解釋するものもあり、唯物論の横行するに至つて、唯物的に解釋するものも生ずるに至つた。芥川龍之介の桃太郎の話が經濟上の問題を唯物的に取扱つたので其一節を掲げた或る中等學校の教科書が發賣禁止に成つたことがあります。

改訂小學國語讀本卷一には此のミリタリズムの非難を避けて、毎年鬼が島から鬼どもが日本を荒しに來るので桃太郎が之を退治（征伐でなく）して世の中を平和にしたいといふ人道的な心持に改められてゐます、又寶物を奪取したのではなくして、命を助けてもらつたお禮に鬼が差出した意味になつてゐる、又鬼共が降参して前非を悔い心から罪を詫びると直ちに寛容して罪を宥してやつたとあります。一遍小學讀本を讀んで見て下さい。此のお伽噺は元來佛敎から生れたものでありますから、人格修養上の敎訓を盛つたものと思ひますが尙日本精神を高揚し國體と相通するものがありました此の世紀的大轉換期に際し、國民の奮ふべき處を指示してゐること

が多いので其點を申上げて見たいと思ひます。

三、人格修養上の敎訓

1、人格とは何ぞや

それで話の順序として、先づ人格修養上の敎訓に就てお話を致したいと思ひます。一體『人格とは何ぞや』と言ふ問題から極めてかゝらねばならぬのですが、之は仲々六ヶ敷しいのであります、學校の修身書や倫理學講義百科辭典を獵つて見ても、抽象的で實體が容易に捉めない、心理學者と法律學者とでは各々其見解を異にしてゐる。私は本多日生上人の申された人間の心の奥底にある眞の心即ち誠心これが基本人格であり、智、仁、勇が屬性人格であるといふ説明が、一番ハッキリしてゐて、其實體をつかみ易いと思ひます。



感情を表はし、仁者の代表であります。

この智・仁・勇を代表した犬・猿・雉が桃太郎に統制されて、鬼ヶ島の鬼退治といふ大目的に向つて勇ましく進んで行つたのであります。

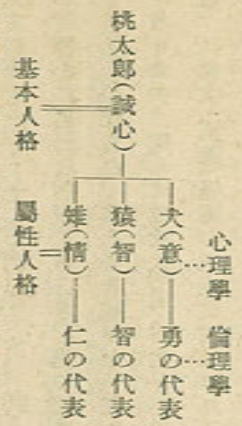
2、圓滿なる人格とは？

一體犬猿雉といふ性格の異なる而かも互仲の悪い者共が如何して鬼退治など出来たかと云ふことは大いに研究すべき問題であつて、是は圓滿なる人格者桃太郎によつて統攝されたからであると思ひます。

實際吾々の、智情意といふものはなか／＼一致しないもので、伊達政宗の敎訓に智に過れば狡猾なり、意に過れば頭になり、情に過れば損をするといふことを述べて居るが、この智・情・意の中庸を得ると云ふことが六ヶ敷しい、其處を統制して各々の性格を發揮せしめて行く時に其人の人格が光を放つのであります。智・情・意が無統制に飛び出すのは其人の誠心が居眠りして居るか其能力を失つて居るからで、人格の破産者と申すべきであります。

此に於てか圓滿なる人格とは誠心に依つて智・情・意が統合

根本の人格即ち『まこと』を本にして優しい心、正しい心、勇ましい心の動く所に智、仁、勇の三徳の生ずることを説いたのが聖賢の敎であります。井上哲次郎博士は人格を定義して知、情、意を主宰し統一作用を爲すものを云ふと言はれて居りますが、桃太郎の話が亦能く此等の關係を訓へて居ると思ふのであります。



桃太郎の伴をした犬・猿・雉は何を表徴して居るかといふに、犬は忠實剛健なもので、意志の鞏固なことを表はし勇者の代表であります。

猿は、猿の猿智慧と云ふから智慧を表はし智者の代表であります。

雉は『燒野の雉子、夜の鶴』と云ふて、子を愛すること一きは強い鳥で、又夫婦の情愛も洵に濃やかであると云ふから

發揮せられたるものを謂ふと云ふことになります。之を訓へたのが桃太郎であります。

3、鬼ヶ島とは？

それから鬼ヶ島に就て一言致しますが、一體鬼ヶ島といふのは何處にあるか、又あの角の生えた、虎の皮の褌を締めた鬼なるものが居るでせうか？ 日本には鬼は居なかつた、是は印度から佛教と共に渡來したものだ。今日では百鬼夜行といふて新聞を賑やして居る有様です。然し之は他人事ではない、靜かに自己を反省するとき、鬼の様な心の醜さをまざ／＼と見せつけられ、其を掻き振りたいた様な氣がすることが度々あります。鬼とは地獄・餓鬼・畜生とか云ふて怒の固りである。又食欲・憤怒・愚痴の三毒に悩まされ苦しみ迷ふて居る吾々の心なのであります。

而かも色々の鬼が心の中で葛藤してゐるのでから、鬼ヶ島とは吾々の肉團其物なのであります。海山越えて他所に在るのではない。鬼を退治して寶物を獲たと云ふのは、釋尊の所謂降魔成道くだまにんじょうだうのことで、靈性を發揮して眞如法性の如意寶珠を得たことであります。決して分捕つて來たのでも何でもない。

つた。然るに八紘一字の肇國の理想に向つて國民精神を凝らせた時に、翕然として皇道の大旗の下に集り雄々しく進軍を續ける様に成つたのであります。故に人間には高き理想を與へるといふことが必要であります。

大體小我に囚はれて居る間は駄目で、我情・我意・我見を捨て、中心に歸ししなければならぬ。我情・我意・我見に執する間は人格は完成せぬ、捨我精進する時に人格が漸次に磨かれて行くのである。此事を犬・猿・雉は人間に訓へてゐる。而して人格が發動する場合に智・仁・勇が如何様に働き出すかといふに、『犬は曳出すエンヤラヤ、雉は綱曳くエンヤラヤ、猿は後押すエンヤラヤ』とある様に、意志が働いて實行に移すのが感情が先に立ち智慧が後車を押す、新しく協力一致して初めて勢よく前進出来るのであつて、新しくこそ圓滿なる人格が現はれるのであります。

5、模範的人格者日蓮聖人

新しく觀じ來るとき、最も模範的な人格者を日蓮聖人に見出すのであります。所謂富貴も淫する能はず威武も屈する能はず匹夫の心奪ふ可らず。自ら省みて縮くんば千萬人と雖も吾

い、それを掠奪したなどと考へるから見當が違ふ。

4、人格完成の道

十界を迷悟の二つに分ち迷を去つて悟に到る其の悟れる者完全人格者を佛陀といふのであります。然らば如何にして完全人格者たり得るか、成佛が出来るかと云ふことに就いて桃太郎は『我を捨てよ、慾を去れ』と訓へて居ります。慾を去れといふても却々出来ることではない、大死一番を要するのであります。我を捨てる是れ亦却々容易なことではない。然るに桃太郎は私の強い慾張りもの、犬・猿・雉に此事を苦もなく實行させて居るのである。慾を去れとか、我を捨てよと言はなくとも、此を實行させて居るのである。其れは鬼を退治して世の中を平和にするといふ最高目標に向つて合一せしめたからであります。犬・猿・雉には意識的に我慾を捨て去つたのではなかつたかも知れないが、桃太郎の人格に統融せられて理想に向つて一意邁進したのであります。滅私奉公捨我精進とは此事であります。吾々人間を單に生活にのみ離解せしむる時は利己的になつてお互に鬭争の絶え間がない。日本國も滿洲事變前迄は物質的に傾き階級鬭争等國內の相対が絶えな

往かんといふ體の人格の本質を遺憾なく發揮して居ります。聖人は『智者に我が義破られずば用ひじとなり、其ほかの大難風の前の塵なるべし』と言はれ透徹せる理智の上に立つて諸宗を折伏せられ、又『鳥と蟲とは啼けども涙落ちず、日蓮は泣かぬとも涙ひまなし、此の涙母の赤兒に乳房を含ましめんと勵む慈悲なり』と云ひ、又土籠御書を拜しても、如何に聖人が情操に富み慈悲深き方であつたか窺はれます。又『一期を過ぐる程もなければ如何に強敵重なるともゆめ／＼恐るゝ心なかれ退く心無かれ……』と申され、其意志の剛健なる、吾等を感奮興起せしめずには措かぬのであります。然し日蓮聖人があれだけの大事業を成したのには、單に意志の鞏固なだけで爲し得たのではない、護法の熱烈なる感情に燃え、確乎たる眞理に立脚し智慧が優れて居つたからであります。而して聖人の智・仁・勇は完全圓滿に發達し綜合的に發揮せられて居ることを知るのであります。

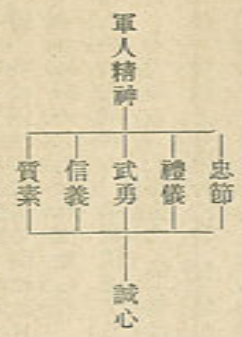
四、國體觀上の教訓

1、桃太郎と日本精神

愈々本論の國體觀上の教訓に就て申上げたいと思ひます。

先程も申上げましたやうに、桃太郎は日本人に非常に持て囃やされ、巖谷小波の如きは、桃太郎は正義・慈愛・威徳・武勇・寛容の徳を兼ねた日本の英雄であり、國民精神の権化であると褒め讃へ、桃太郎主義の教育を鼓吹しました。誠に同感でありまして、私は桃太郎は日本精神の表徴だと思ふのであります。

軍人勅諭に忠節・禮儀・武勇・信義・實素の五ヶ條を御示しに成つて、「此五ヶ條は軍人の精神にして、一の誠心は又五ヶ條の精神なり」と仰せられてあります。



五ヶ條は誠心の現はれである。誠心から一切の徳が顯はれ五ヶ條となり、智・仁・勇と成るのである。故に、誠心は軍人精神の心髓であり根本であるとの仰せであります。此を以て誠心は基本人格であると拜する次第であります。

の表徴だと云ふのもそれであります。今日日本精神の高調せらるゝ所以のものは、非常時局に對應する爲め、忠勇義烈の精神を高揚するばかりではない、歐米模倣の夢から醒めて、眞の日本の姿に還れと叫ぶものであり、延いて、國際的に日本の眞精神を擧揚し世界をして日本精神に光被せしめんとするものであります。

何んとなれば軍人精神五ヶ條は、明治天皇が我傳統的國民精神の精髓を擧げられた日本精神であつて、世界何れの國民精神よりも卓越優秀なるものであるからであります。

然るに國民中に未だ歐米模倣から脱却しないものゝ多いことは如何したことせう、

2、肇國の理想と建國の三大綱

我が國體が世界の絶對平和を理想とすることは神勅に明かなことで、桃太郎が鬼ヶ島を退治して世の中を平穩にしたと云ふことは皇國日本の使命を物語つて居るのであります。日本の國が何故に此の地上に打ち建てられたかを考へると、天照大神は單に大和民族が安樂に暮せる様にと云ふ様な小規模な考へで無かつたと思ひます。高天原の文明を下して此

又「之を行はんには一の誠心こそ大切なれ」、「心だに誠あれば何事も成るものぞかし」と御諭し給はつた事は實踐上の要諦を御示し下されたもので誠に有難いことであります。而して「此の五ヶ條は天地の公道人倫の常經なり行ひ易く守り易し此道を守り行ひ云々」と仰せられた事は、教育勅諭に「新ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ……之ヲ古今ニ通シテ譯ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」と仰せられたことゝ合致するのであります。

軍人精神 五ヶ條 誠 天地ノ公道 道 惟神道 皇道 國體 日本精神

白雲のよそに求むな世の人の 誠の道そ敷島の道

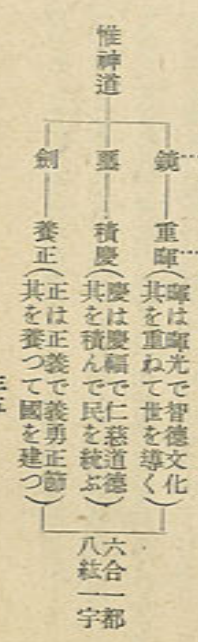
と仰せられてありますが、敷島の道と云ひ、武士道と云ひ、大和魂と云ひ、軍人精神と云ひ、日本精神と云ふも、夫々時代の要求によつて言ひ表しや作用(用道)が異つても其本體(體道)には變りがない一の誠心である。桃太郎は日本精神

の地上に眞の平和を打ち建てん爲め、天孫を降臨せしめられたものと拜します。其時の三種の神器が絶對平和の指導原理を啓示して居ります。即ち世界の所有文化を包容攝取して鏡に照して之に正邪判別を下し、邪惡なるものは劍を以て之を打ち懲し正義を擁護し恢弘し畢竟して勾麗の様な平和な世の中にしやうと云ふ御理想をお示しに成つたものと拜するのであります。

此事は歴代の御詔勅により窺はれるばかりでなく、歴史的事實が之を證明して居るのであります。

之れが神ながらの道と成つて傳はつて居ります。三種の神器を解釋して或は智・仁・勇とか或は公明・仁愛・勇斷とか或は神々しさ、懐しさ、清々しさを示したものと説く人もあります。日本書紀に載せられた、神武天皇の詔の積慶・重暉・養正は建國の三大綱を宣示せられたもので、之を三器に配すると次の如くになります。

肇國の理想 建國の三大綱



神武天皇の御宣言で日本國の精神主義として、御先祖の音から御子孫、代々は申すに及ばず、國家國民を擧げて、持つべく守るべき國の命たるべき主義で、廣く世界人類を統化すべき最高道義であつて人類至上の根本文明であります。

肇國の理想を八紘一字の言葉を以て言ひ習はして居ります。神武天皇の詔には「皇孫正を養ふの心を恢め然る後六合を兼ねて以て都を開き八紘を掩ひて宇と爲さんこと亦可からずや」と仰せられてあつて、六合一都八紘一字と對句にすべきものであります。六合一都なしに八紘一字はあり得ないのであります。然るに六合一都といふことを遠慮して居る傾のあるのは遺憾であります。

3、皇室の尊嚴と應身爲本思想

國體の高邦無比なる所以は、肇國の理想に基く皇室の尊嚴に在ることは皆標榜と御承知のことなのであります。私が特に茲に肇國の理想に大目的精神を先に擧げた所以のものは、天皇は天照大神の御血統を承継せられて居るばかりではなく、其御精神御靈を承継せられて居られる、其の御印として三種の神器を承継せられるといふことを強調したいが爲

めであります。先程中村先生は「中心的人格者の崇敬」と言

つて居られました。宇宙絶對の靈徳神明の威徳が、現人神であらせられる。天皇の事實に一切統攝されて居るといふ観点であります。其を昨日磯部先生は「應身爲本」といふことでお話になりましたが、之は我が國體觀上重要なことであり、桃太郎が智・仁・勇を兼備したる如く、佛様は智慧・慈悲・活動の能力を具へられ法・報應の三身に顯はれて救済の活動をなさる、一身即三身、三身即一身であるが、應身を本位と爲すといふ此の思想は我が國體の上に於ては一切の徳が明津神天皇に表現せられ、皇國の活動發展は、天皇の威徳の顯現である。此事は我が國の歴史は皇室を中心として發展して来たといふ事實が雄辯に物語つて居ります。而して吾々は天皇を吾々の主・師・親の三徳聖として拜するのであります。そして犬・猿・雉が桃太郎を扶けた様に國家國民一億一心一體となつて皇讓を翼賛し奉らなければならぬのであります。

4、一君萬民、大業翼賛體制

世界は今、御承知の通り大動亂、大轉換の眞只中に在ります。之はフランス革命後の思潮であつた自由主義、民主主義

を背景として、所謂イギリス的秩序で發展し、又固められてゐたところの世界が行き詰つて新しい世界觀に基づく處の世界、即ち通俗にいふ全體主義的な世界に成りつゝあるのであります。即ち世紀の轉換、世界の轉動といふ過程に進んで居るのであります。それを乗切る爲めに世界には色々の現象が起つてゐます。支那事變もそれであり、ヨーロッパの戦もそれであつて、それは東亞の新秩序と云ひ、ヨーロッパの新秩序と云ふ言葉で言ひ表はされてゐますが何れも世界の轉換といふ大きな動きであります。そこで此の世界の轉換に即應すべき國內の體制を建直さなければならぬといふ必要に迫られて來ました。今日の戦争は所謂總力戦であつて、國力を擧げての戦争となつて來ましたから、國內の政治・經濟或は生活といふものを事變前の通りにして置いては大戦争が出來よう筈がありません。

戦争が大規模となり長期戦となるに及んで、日本自體が從來の様な自由主義的な政治機構の上に立つての政治のやり方、經濟のやり方ではどうすることも出來ないといふ情勢になりました。

日本は支那事變を完遂し、肇國の精神に基いて大東亞の新秩序を建設し進んで世界の新秩序を確立する爲めには、高度國防國家の建設が必要であり、眞に國體の本義に徹する萬民翼賛の日本本來の姿を十二分に發揚せねばなりません。之が爲め所謂新體制なる言葉を以て呼ばれる日本の建直し昭和維新の必要に迫られたのであります。昭和維新の根本理念は、天皇親政萬民翼賛に在ることは申す迄もない事で「草木も木も皆大君のものなるにいくそ鬼のすみかなるへき」の古歌にある如く、國土に在る總てのものが大君のものなのである。「今此三界皆是我有」とあることからしても然るべきである。故に國家の御用とあれば吾々の身も財物も皆御上に捧げなければならぬ、個人主義的なる考へは許されないのである。又一君萬民の姿であるべきで中間に政黨や幕府の如き支配階級の介在を認めぬのである。只億兆一心皇道に歸一し大業を翼賛し奉り成其徳を一一にせんことを期すべきものなのであります。然し新體制一億一心と言ふて居るが一度電車の中に這入ると我利々々亡者になつて我勝ちにといふ淺間しいものになる。是れでは心の新體制は整つて居らぬのである。

5、世界新秩序と共存共榮園

大東亞の新秩序建設といふことは世界新秩序確立の中核をなすのであつて、東亞新秩序建設が世界新秩序建設の契機をなし、且つ之を推進するものであります。

世界の新秩序といつても、今日のところ、世界を一單位とする組織の完成を期待することは出来ません、古い領土侵略的精神ではなく、共存共榮といふ崇高なる精神の基に生存圏を確立することでありませぬ。世界諸民族が狭い個人主義的の理念を捨て、もつと廣い大きい理念の下に數個の共存共榮園を形成することは必然の勢であつて、東亞・アメリカ大陸・ヨーロッパ・ソヴイェト聯邦といふやうな共榮園が形づくられて行くのであります。

そして日本が大東亞の共存共榮園を指導すべき立場に立つことは、歴史上から見ても地理上から見ても經濟上から見ても必然の勢であります。

日本は兎に角日・滿・支を中心に南方を含めて所謂大東亞共榮園を確立して行かねばなりません。それには斷乎たる決意を要するのであります。

6、轉輪聖王

長阿含經に、
爾の時に東方の諸の小國の王は、大王の至れるを見、金鉢を以て銀粟を盛り、銀鉢に金粟を盛り、來りて王の所に趣き、拜首して白して言さく、善來大王よ、今此の東方の土地豊榮にして人民熾盛なり、志性仁和慈孝忠順なり、唯だ願くは聖王よ、此に於て治止したまへ、我等當に左右に給使して所當を承受すべしと。時に轉輪大王は小王に語つて言く、止みね止みね、諸賢よ、汝等は則ちこれ我を供養し已れり、但だ當に正法を以て治めて偏枉せしむること勿るべし、國內をして非法を行すること有らしむる無れ、此を即ち名けて我れの所治と曰ふと。時に諸の小王此の教を聞き已つて、即ち大王に従つて諸國を巡行す。東海の表より次で南方西方北方に行き、輪の至る所に隨つて、其の諸の國王は各國土を獻すること、亦東方の諸の小國の比の如し。時に轉輪王既に金輪を隨へて周く四海を行ぐり、道を以て開化し、民庶を安慰し已つて本國に還りたまふ。時に金輪實は宮門の上に在りて虚

空の中に住す。

雜一阿含經に

聖王東海より度つて古聖王の道に乗じて南海に至る、南海を度つて西海に至り、古聖王の道に乗じて西海を度つて北海に至る、南西北方の諸の小國の王奉迎し啓請したてまつること、亦東方に廣く説くが如し、是に於て金輪實は聖王に従隨して北海を度り還つて王宮正治の殿上に至り、虚空の中に住す、是を轉輪聖王世に出興し金輪實世間に現すと爲す。

とあります。即ち轉輪聖王が東に出て南海を征伐し、それから西海に行き、更に北海に至つて、また東に戻つて來る、さうして世界が統一されて、各國の國王が歓迎するその時に、轉輪王が今言つたことを宣言したといふことが出て居ります。轉輪聖王の理想といふことは、皆さんも御存じのことです。ありますが、今の時代に日本が東の方から出て、南の方に行き、それから西の方に發展して、更に北の方に廻つて、再び東の方に歸つて來るといふことを暗示して居るかのやうに考へたので、このお經文を長々と引用した譯であります。

7、世界の新情勢に對する日本人の覺悟

日本は目下未曾有の國難に直面して居ります。之れは日露戰爭以後英米の逐次加へ來つた壓迫が今や其最頂點に達せんとして居るのであります。自由主義の英米は全體主義の國家を屈伏せしめるのだと豪語して居ります。

日本は之に對處するの十分なる覺悟を要するのであります。獨伊と同盟を結ぶこともよし、ソ聯と手を握ることもよいのであります。由來我が國體が舊殼を脱して改新し發展せんとする時には常に外國の壓迫が重大なる一契機をなして居ることを見るのであります。明治維新然りであります。今日昭和維新に方り未曾有の國難來る又天の采配と見るべきであります。吾々は高度國防國家體制を確立し、敢然起つて之を乗り切る覺悟がなければなりません。

涅槃經に

刀兵の劫には大力勢を有し、其の殘害を斷じて遺餘なからしめ、能く衆生の種々の怖畏を斷ぜよ。

とあります。斯ういふ風に戰をする時代になつた時には、大勢力を有して敵の殘害を斷滅して、衆生をして怖れを抱かせ

ないやうにしなければならぬと言つてあるのですが、佛教は正に斯の如く強いことを教へて居ります。日本としても即今躋を固めてかゝらねばなりません。

五、結 言

國內新體制にいろ／＼新體制を擧げられて居りますが、如何に立派に制度が整つても、要は人間がその土臺を成すのであります。戦をするのでも人的要素が必要で、人が少く、また人の質が悪ければ戦には勝てないのであります。有ゆる事に於て人が本になるのであります。

日蓮聖人も

國は法に依つて昌へ、法は人に依つて貴し。

と申して居られます。如何に制度を立派に定めても、これを取扱ふ人間が悪ければ、制度そのものは立派に運用出来ないのであります。法律、規則も、これを取扱ふ人間が悪ければ活用しないのでありますから、人間を作ることを先づ第一に考へなければならぬ。さうするには、人間を正しき信仰に依つて人格を築き上げることが第一であります。

長い間纏りのない事を申上げて恐縮致しますが、要するに株太郎の癖は、人格完成の方法を訓へ、且つ日本精神を高揚し、國體を闡明したものであると思ひますので其教訓をとつて人格を磨き、立派な日本人を作り上げて、大日本國の使命達成に向つて邁進したいと思ふ次第であります。終り。

音の哀樂を以て國の盛衰を知ると。詩の序に云く、
治世の音は安くして以て樂しむ、其政和げばなり、
亂世の音は怨んで以て怒る、其政乖げばなり。亡國
の音は哀んで以て思ふ、其民困しめばなり云云。近
代念佛の曲を聞くに理世庶民の音に背き、已に哀樂
の響を成す、是れ亡國の音なるべし。

— 日 蓮 —

全國教化大會の記

磯 部 滿 事

光輝ある紀元二千六百年を慶祝すると共に教化報國の實踐を通して東亞新秩序の建設に寄與すべき方途を講ぜんとする目的で、中央教化團體聯合會、奈良縣、奈良縣教化團體聯合會共同主催の下に、去る十月十日十一日の兩日、奈良縣畝傍町極原神宮境内の建國會館に於て全國教化大會を開催することに成り、本團よりも一名参加下さる様にとの依頼を東京府教化團體聯合會清浦會長より受けたものであるから、不肖これに参加致したので、左に報告旁聴か私見を附記して團員各位の御叱正を仰ぎたいと思ひます。

先づ東京より大和畝傍への道順を申しますならば、東海道名古屋より参宮線に倚るものと、京都より奈良電鐵又は省線に倚るものとあるが、名古屋からが普通の行程らしく、時間の上からも、經濟の點からも採るべきである。唯乗換の度數からせば、京都より奈良電鐵に乗るのが一番便利と思はれた。大和に入つての沿線は流石に昔しが追憶されて、時間に餘裕あつて心のまゝに名勝古蹟を訪ねられたらば……との念が切であつた。

驛は極原神宮と畝傍御陵前とにあるが、單に参拜する方からすれば、神宮驛下車で道幅四十四米の表参道を凡そ八百米西北に進み、森嚴莊重の聖域に臨むと、二つのすばらしい檜造りの大鳥居があつて、いよ／＼木の香も高い表参門を入り、清々しい玉砂利の廣場を過ぎて外拜殿に達するのである。

それから神宮の裏神門を出て更に參道を北へ進むこと約五六百米で、畝傍山東北陵を拜することが出来る。

この御陵の附近には、第二代綏靖天皇、第三代安寧天皇、第四代懿德天皇の各御陵があることは一入有難い。

其他久米の仙人に關係ある久米寺や、壹飯靈驗記で有名な壹飯寺や、聖德太子と因縁の深い橋寺乃至蘇我氏や、藤原氏等に於ける史蹟を述べべき場所が數々あるけれ共今は略して、直ちに教化大會に於ける議事の要旨を示したい。

日支事變の勃發以來既に四ヶ年、出征將兵の勇奮力闘と統後國民の一億一心の盡忠報國の誠は克く大業翼贊の美を濟しつゝあるの時、偶々日獨伊三國同盟の條約を締結されたことは、一層深い大なる重任を國民は負擔すべき次第と痛感する次第である。精神作興の急今日より大なるはあるまい歟。異體同心の聖訓は泌々と胸をうつ。

眞に新體制の樹立を發表されたが、而かも或る一部の人等は其の内容に迷ひ、随つて實踐の上に甚だ不徹底であることの憂なしとせざる現状を顧みて、國民教化の任にある者、如何に重且つ大なるかを想はしめられる。

今回の協議事項は全部八項目であるが、その内最も論議すべきは二三項であると思ふ。即ち第一の議案は、文部、内務兩大臣の諮問事項として、

現下内外の情勢に即應する不拔の國家態勢を確立するため、その根柢たるべき國民道德徹底上最も主力を注ぐべき事項如何。

といふのである。そこで全國から參集した九百の教化關係者は、僅か二三の意見開陳の後、直ちに委員付托を以て左の答申を決定した。

現下内外の重大事態に即應して、國運を不拔に培ふの途は、聖旨を奉體して和衷戮力一元的综合國家態勢を確立するにあり、而して之れが根柢たる國民道德徹底上最も主力を傾倒すべきは、我が肇國の大理想に基く一郷一家

郷民一家族の親愛に立ち、左記事項を實踐するにありと認む。

記

- 一、國民生活の一切を擧げて、國家目的に歸一融合せしむること
 - 二、皇民的禮讓、教養を厚うし以て東亞指導者たるの資質を涵養すること
 - 三、經濟行爲即道德實踐たるの觀念を徹底すること
 - 四、國民皆戰士たるの信念を強調し、特に軍人援護精神の昂揚を圖ること
 - 五、高度國防國家の眞義を諒得し、戰時下國民としての言動を慎むこと
 - 六、公共道德の向上に力め統後生活に新秩序を招來せしむること
- 右實踐に伴ふ必行要件左の如し
- 一、爲政者を初め總じて指導的地位にある者は政教一致の本義を體認し、自ら良き先達たるの自覺をもつて率先示範の責を擧ぐることに
 - 二、市區町村、部落會、町内會、隣保班等の常會に於て右徳目の浸透を圖ること

○ ○

議事の進行上、各自の意見を一々聴取するといふことは統制上困ることもあり、時間も許されまいが、併し又出席者の意見開陳の自由を拘束することも其趣旨に背くものであるまいか、兎も角此會の行き方は概して官僚的であつた、豫定の行動で獨斷の嫌が濃厚であつた。併し夫等に盲従する多數は拍手で終るであらうが、眞に天下を憂ひ法國に忠なる者は、モット獨自の立場から人々の反省を促がすであらう、これ敢て我意を主張するのではない、勿論決議に反對だといふのでなく、一層力ある實行運動を瞻望するからで、これ偏へに君國に殉するに外ならぬのである。誤

さて今日不拔の國家體勢を確立する爲の根柢たるべきは、國民道德丈けでよいかといふことが根本的問題なんである、人格の陶冶を教育と國民道德に限つた行き方といふものは、未だ人間の本質を辨へない凡愚の淺識からであつて、眞に人といふものを知つた聖者の教では、學問と道德と宗教といふものを切り離すべきではなく互に調整し融合せしめて行く處に立派な人間が出来上るのであり、又人間としては世界人、宇宙人たると同時に一國人であるのであることを理解するのである。又一國人であると同時に一社會人、一家庭人なのである。即ち小さく見れば芥子粒ともなり、大きく見れば大宇宙も猶ほ足らずとすることを想ふのである。而してそれが只漠然たるものでなく、この五尺の人間が十界の中心であり、我國に於ては上に萬世一系の御皇室を戴いてゐる處に秩序整然たるものがある。かういふものゝ見解方法は矢張り哲學的の學問でない、科學的の行方ではもの足りないであらう。物質文化も精神文明もこれ又互に相扶けつゝ助長して用立つべきもの、決して相諍ふべきではない、聖教は物心一如といふことを示教されてゐる。隨つて今不拔の國家體勢を確立する爲その根柢たるべきものは國民精神の作興に俟つべきは明かなことであり、この精神作興の上に主力を注ぐべきものは單に國民道德だけであつてはなるまい、一般道德も大切であり、更に宗教の發心といふことが特に現代は肝要であるまいか、宗教心といへば直ちに宗派の考を以て見るやうな神經過敏でなく、モット落付いて宗教の眞價を認識することが國家を教ふ上に絶對必要條件と思ふ、否これは古聖の誨である。宗教心こそ一切の道の源であり、徳を生む所の母であると仰せられた、聖德太子は有名な憲法の中に「其れ三寶に歸せざれば何を以てか枉れるを直うせん」と示され、佛法僧の三寶歸依即ち宗教に據らねば人心は正しくならない、篤敬三寶といふことが、全人類洋の東西を問はずすべてのものゝ根柢とする理想であり、生命線なのである。畢竟する

に道德は國民道德にしても亦一般道德にしてもそれは相待的の善を指すものである。自分と他人と相待して五倫五常の實行を望むが、靜かに自分を反省した時、いかにも本能欲の熾盛にして迷ひ深い塊りであるかを恥かしく思ふであらう、故に善い事をしたと思ふ反面にマア明日からとか、マアこれ位は許されるだろうとか、或は衣食足つて禮節を知るだ、生活の爲には少々位は無理なことをしてもといふ様に、自分でいゝ加減な理窟をこしらへ其場を糊塗して更に明日とか將來の大計に及ばず、目前の執着から脱れないのが普通なのである。

宗教に來ては自分の煩惱に支配される善でなく、迷から離れて覺者の教に導かれる一舉一動は、人間同士の相對善から飛躍した佛陀の善であり、無限の善、絶待善なのである。お五人間は「私は高等の教育をうけて居ますよ」と高慢振つても、一寸先は暗黒なのである。世間の動向どころが自身の生命さへも知らないのである。佛陀は御自身のこととは勿論、大宇宙に於ける森羅三千の諸法の實相を覺了し一つも謬りがないから大覺者なのである。常に現在ばかりでなく始めない久遠の昔から、終りない永遠の將來に亘つて一切を了達されてゐる人格實在者在で在します。而して此の聖者の説かれた教法と、其の教の中に含まれてゐる眞理とが完全である處に正しい宗教の價値が發揮されて居るといへるのである。若しも非理の教法であつたり、説法者の人格に缺陷があつたりするならば立派な宗教といふことが謂へない。そこで宗教類をしてゐる世間の二三のものを比較對照してみると、其正邪善惡が忽ち斷定されるであらう。多くの人は宗教の形式化した宗派を見て、宗教がどうかとか、こうだとか云ふが、それは目標違ひで純潔な人々の宗教心をば、墮落した宗派と同一に論ずることは根本的の謬想であるまいか。

詮ずる所宗教を尊信しても決して道德を輕視してはならないし、又道德一本槍で宗教を捨てることも正しいものではない、人間といふものは殊に神洲の民草は人倫の常道を堂々と履んで、それが直ちに進んで超人格者と合一せなければ、眞の日本人と誇れまい。この感想は特に攝原の神域に於て、二千六百年前を追憶し一入深刻に胸うたれたので

ある。神武天皇様は長くも法華經とは深い因縁のおはしますことを拜し、法華經と日本國は最初から連りがあつたと定に不思議に思ふ。希くば人々よ、宗教を尊信せよと叫ぶ一人であります、宗教なければ國家は滅亡することを斷言して憚らぬ、嗚呼憂ひなる哉であります。

次に論じたいのは、中央教化團體聯合會提出の協議事項である。即ち

一、新體制下に於ける教化立國の本義顯揚の方策如何。

これに對する決議は、

政教一致は我が國體の本義なり、列聖教化を治國の要諦とし以て天業を経綸し給ふ、即ち萬民大政翼賛の道はかかつて聖旨を奉體して教化の實を擧ぐるにあり、新體制の眞義も亦茲に存すべく之實に教化關係者の年來大いに力を致し來れる所なり。

今や内外未曾有の變局に處しよく興亞聖業の完遂を期せんとす、將に立國の大道を宣揚し以て政治、經濟、文化等萬般に亘り教化を根柢とする皇國眞姿の顯現を期せざるべからず、これ現下國民の齊しく擔ふべき責務にして億兆一心、之が達成に邁進するを要す、その綱領、方針、方法等概ね左の如し。

記

一、綱領

聖國の理想は悠遠にして萬世不易、教化の綱領は普遍にして恒久不動ならざるべからず。

- (1) 八紘一宇の國是を顯現し萬邦協和の理想を達すべし
- (2) 君民一體の精華を發揚し皇國一家の美風を顯すべし

- (3) 忠孝一本の本義を履修し國民道德の根柢に培ふべし
- (4) 物心一如の大法を闡明し國家總力の充實を圖るべし
- (5) 公私一元の本旨に透徹し職分奉公の實踐を盡すべし

二、方針

前記綱領の貫徹に方りては政治、經濟、文化其他有ゆる部面に於て時に應じ、事に従ひ最も適切なる方策を講ぜざるべからざるも、その基調となるべきものを例示すれば次の如し。

- (1) 政治的 爲政の術にある者は、政治即教化たるの自覺に立ち従つてその職責が教化指導の最高部にあるものたるを體認し、率先躬行その本分をあやまらざるを要す。
- (2) 自治的 綱領實踐の基底は素より一家の完成に始まり更に之が集成たる郷土聚落の結束に俟たざるべからず、仍ち部落、町内等に於ける隣保協同生活にありては特に皇國一家の本旨に基き郷民一致して自治運営に協力するを要す。

(3) 家庭的 國家構成の單位を家に置く我が家族制度の眞諦を體得して家庭教化の振興を圖り、特に家長は自ら修め實踐すると共に家族の指導者としてその訓化教育に努め純美なる家風を樹立せざるべからず。

(4) 經濟的 産業其他一切の經濟行爲をして國家目的に合致せしめ以て日常行動をして全的道德行爲たらしむるを要す。

(5) 教育的 一般社會教育にありてはその諸施設を通じ一層綱領の眞旨の徹底を期すべきなり。

(6) 宗教的 不抜の國民精神を昂揚せんがためには宗教的信念の啓培を肝要とすること勿論なるも各宗教團體はその教宗派の別を問はず右綱領に則り教旨の宣布をなすを要す。

三、實施の方法

- (1) 中央、地方の官公の施設としては一元的指導機關の整備を要す。
- (2) 民間にありては大致翼賛運動に協力して本來の使命を有する教化關係諸團體を、綜合統制し強力なる教化組織を全國に整備し、特に地方教化聯合團體の組織を一新して機能の強化を圖り以て政府機關と表裏一體たらしむるを要す。尙之に並行して既往全國教化大會に於て屢次決議せられ且つ關係團體の活動によりて整備せられたる『常會』の適正なる指導に最善の留意を拂ふを要す。

以上周到な決議で、教化の道に提るものは克くこの意を認識して協心戮力すべきである。爰に大事な點は教化といふことは動作であつて、何を以て教化するのとかといふ教法そのものゝ具體的指示がない、各方面臨機應變に最も適切なる方策を執つて各其施設を通じて夫れ／＼任意に努力するやうにとのみで甚だ抽象的の感がするのである。これは無論各教化關係者の意志を尊重した自由主義的のものである。そんなら我が國に於ては纏つた國教がないのであらうか、否決してさうではあるまい、日本の精神的文化の精髓は神道、儒道、佛道この三道融合の大道にあることは既に聖德太子に依り、又平安朝時代にも、鎌倉時代にも碩學先德に依つて唱導されて來たのであつた。徳川の中葉から尊い歴史を無視して三教が各孤立して他を排するといふやうな弊の起きたのは恰度鼎の立たぬやうに極めて遺憾なことであつた。たとへば一本の樹にしても根幹をなす神道と、華花たる儒教と、果實である佛教は分難すれば樹の生命はないやうに、指導精神も滅びる。それがお互に相扶け相倚つて其本分を發揮する時、國民精神は啓蒙向上し、國威は昂揚されるのである。

各教化の任に起つ者は宜しく思想を浩大にして包容且つ統一的でありたいと思ふ、小さい自己中心となつたり、同

氣相需めて黨を爲すといふやうなことは戒むべきであらう。そこで此際教化立國から一步前進して教法を確立した上に國家を安泰ならしむるやうに努力することが肝要であるまいか。各自の意志を尊重して其の信奉する所に倚つて邁進することなればこれは舊體制である。面倒なことであつても、時日を要しても教法の統一を期せずしては、國民の奮ふ所、羅針盤を得ないのであるまいか。今は日本人の有識者であつても猶ほ全體主義を口にする者あるを見ては寒心に堪えない。極めて注意を要する現代に於ては先づ國民精神の統一を圖るべきが最大急務であり、それには教法の新體制を必要とする。邪法邪教が對治されて始めて黎明の鐘は朗かに響き、東天は紅色に輝くであらう。興亞は素より世界人類の救済はこゝからであることを確信する、本定まつて用起るべきか、立正安國なることを痛感し、度で諸彦の御高教を仰ぐ。(以下略)

日蓮聖人一昨日御書の一節(意譯)

日蓮、生を此の日本國に稟けた。豈に我國の現在並に將來を思はざるを得ん。仍つて義に立正安國論を造つて、故時頼入道に宿屋入道光則を通じて上書した、其の書には今の國情を述べ、その原因を明かにし、進んでこれが救済の道を説き速かに一乘の教に歸すべきを力説したのであつた。然るに日蓮の忠言を聽かず却つて迫害を加へたが、近年頻りに夷敵が我國を侵逼せんとしてゐることは既に日蓮彼の書に明した通りである。

日蓮は全く國家を思ひ、教法を思ふが故に今日迄身命を惜まず、立正安國の運動を續け來つたので、その言ふ所符合する處を見れば日蓮の忠誠は承認さるべきものでないか……未萌を知る者は六正(聖、良、忠、智、貞、直の六正)の臣中でも聖臣と稱して最上の者である。日蓮今佛意に照して我國の將來を勸ふるに、今日迄の事は皆悉く符契した。恐らく先哲には及ばずと雖も後人には稀な者であらう。此の知法思國の志こそ當然賞讃さるべき處、邪法邪教の輩、義奏義言するが故に、久しく大忠を懷きつゝも、遂にその一端も果し得ない……

君が世の由來と其の意義

和田 信 二 郎

國歌君が代齊唱の聲が、朝のすがすがしい空氣を傳つて爽かに聞えて來ます。今しも常會で宮城遙拜、神宮遙拜、祈念を了へて國歌齊唱に進んだのでありませう。莊重にして、しかも和やかな純日本式の此のメロデーは、我々の體内に溶け込んで、血となり肉となつて日本精神を培つてくれます。

日本人たる者、一人として「君が代」を知らない者はありませんが、その由來はどうか、その意義はどうであるかと云ふ事になると、それは甚だ心細いものであります。はつきりそれを認識してゐなければいかんと思ひます。

まづ第一に歌の意味から述べませう。歌といふものは音數に制限され、又調子を貴ぶところから、語句が省略されたりその位置が顛倒されたりしてあるので、一寸わかりにくい事

があります。「君が世」の歌も省かれた成分を補ひ、顛倒した位置を正して、

(我々國民は)君が代は、さざれ石の、巖となりて、苔のむすまで、千代に八千代に(榮えませとお祈り申すのである)

として解釋致しますと、意味はよくわかります。我が 天皇陛下のお治めあそばす此の御代は、千年も萬年も、いやいつまでもいつまでも、譬へば小さい石が育つて大きな巖になりそれに苔が生えるまで、それ程永く、永久に限りなく御繁榮あそばしませと我々國民はお祈り申し上げます。といふのであります。御代の無窮を祈り奉つたものであります。

X

X

さてそれでは此の歌は、何時頃誰が作つたものであるかと申しますと、それはわかりません。今から凡そ千年餘り前、醍醐天皇の延喜五年(紀元一五六五年)紀貫之等が、勅を奉じて撰進致しました古今和歌集といふ本に出て居りますが、讀人不知とありまして、その頃から誰の歌とは知れず、人口に膾炙して居たのであります。それから凡そ百五十年後、藤原公任といふ人が和漢朗詠集といふ本を撰んで、それにも載せてあります。たゞ朗詠されただけでなく、廣く民間の謡物ともなつて居りました。

「君が代」の歌は、各時代を通じ、各地に互り、種々な場合に廣く國民の口にも耳にも親しまれて居たものであつて、自然に國歌たる資格を備へて居たものであります。誰が作つたとも知れないところに却つて神祕的な所があり、實に「天の聲」と云はうか「國民の聲」といはうか、これが即ち眞の國歌といふべきであります。

X

X

それでは、どうして此の「君が代」の歌が國歌になつたかそれは何時の事であるかといふ事にお話を進ませう。明治

の初年、薩摩藩では軍樂練習生を募集して東京へ送つて修得させましたが、明治三年、野津鎮雄、大山巖の兩氏が第二回練習生二十三名を引き連れて上京し、横濱在留の英國軍樂隊について練習させました。其の時の英國の樂長はフェントンと云ふ人で、まづ日本の國歌から教へようと思ふが、日本に國歌があるかと練習生に質ねました。練習生は日本には國歌と云ふものはないと答へますと、樂長は、それでは早速先輩にお願ひして作つて貰へと申しましたので、練習生の一人が自分達を引率して來てくれた先輩大山巖氏を訪問してその願末を話しました。丁度その席に野津鎮雄氏その他も來合はせて居り、それは尤な事である。早速作らねばならないといふ事になつた時、大山巖氏は、それは今新に作るよりは、古歌「君が代」の歌が國歌として最も適したもので、日本の國歌として是れ以上のものはあるまいと申され、同席の人々も大賛成で、忽ちそれと定まり、練習生は横濱へ歸つてフェントンに君が代の歌を提出し、フェントンはそれに語を付けたと申します。少しも日本語を知らず、又少しも日本の歌の唱ひ方を知らない外國人の作曲したものが、満足すべき効果を齎

らす事の出来ないのは當然な事であります。折角フエントンが作曲したものではありませんが、その曲はどうも我が國の國歌として到底我慢の出来るものではありませんでした。海軍では我が國の軍艦が海外へ行き、又外國軍艦が日本の港に入り、常に外國と直接交渉があり、屢々國歌を國際的に奏し合ふ場合があるのに、どうもこれでは困るといふところから、明治十三年に至り海軍省から宮内省雅樂課へ、國家として君が代の歌に譜を付けて頂きたいと依頼致しました。雅樂課では課員一同緊張して作曲に當り、日本古來の唱ひ方に立脚して數曲を作り、之を海軍へ送りました。海軍では樂長エツケルトといふ人が専ら審査の任に當り、一等伶人林廣守作曲の壹越調律旋のものを最も優れたものとして採定して、エツケルトが和聲を付け、雅樂課員も參聽、試演の結果、確定したものが今日用ひられてゐる「君が代」の曲であります。時は今から六十年前、明治十三年十月二十五日でありました。さうして其の年十一月三日 明治天皇の天長節の御宴會に於て、雅樂課員の手に依つて正式に奏せられたのであります。外國の國歌は多く國民を唱ひ、國土を唱つたりしてあります。

すが、我が國歌「君が代」はたゞ天皇の御長壽を祝する外何もいつてはありません。天皇即國家である我が國では、國家の繁榮も、國民の幸福も、自から其の中に含まれてあります。

何時、如何なる場合に、如何なる人が詠んだとも知れない此の「君が代」の歌が、千幾百年國民の口から口へと歌ひ続けられ、自然に國歌となりました。國歌としての眞の價値は實にこゝに存すると思ひます。此の「君が代」の歌が國歌になつたといふところに、我が國體の眞髓があらはれて居ります。又その曲も専門家の言ふところでは、世界に對して我が國の威嚴を示す表徴となつてゐるといふ事でもあります。

我々國民は、かゝる得がたい國歌を持つた事に感謝せねばなりません。そして、千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで、此の歌を唱ひ続けねばなりません。

(常會)

靈跡並史跡巡拜卽事

— 相 州 —

金子 妙 華

龍 口 寺

妙 本 寺

日 朝 上 人 土 牟

鎌 倉

大 塔 宮

— 豆 州 —

玉 澤

伊 東

川 奈

祖 岩

葦 山

寂光山登帶斜陽松蘊滿聲繞祖堂不滅法身真佛土星霜七百法燈長
 夜色蒼茫大海邊不辭艱難隔人天秋寒一劍頭將斷法喜欄題聖日蓮
 老樹山谿苔氣清香煙斜與白雲輕上方鐘響妙光遍看到天華燦々明
 土窟濼々夏向寒梵鐘響斷夕陽殘傷心讀了祖師語想到當年離別難
 源家遺跡夢茫茫弔古低徊轉斷腸一路亂松空有影白雲搖曳暮山蒼
 世路艱難事已空奸臣黃舌恨無窮崖陰土窟腥風冷杜宇一聲深樹中

—— 豆 州 ——

鴈語溪聲古寺門石蹊苔滑綠陰繁惟看兩境今如昔欽仰昭師德行尊
 晴嵐影動古松青實開巍然聖德馨春晚夏初新綠裏殘鶯仍唱法華經
 白法無全道豈窮危難當讓受其躬四恩機國垂明教志節遙高流誦中
 負山臨海一漁村沙渚煙深雨色昏護法聖僧流誦日妙經身讀答天恩
 遺竄高僧弘誓眞岩頭濤激似雷噴諸天擁護救危難知是漁翁是法身
 尊王護法一精誠長見芙蓉器識宏函麓江家三十世于今豪族仰高名

紀元二千六百年頌歌

一

遠すめろぎの

かしこくも

はじめたまひし

おほ日本

天つ日嗣の

つぎつぎに

御代しろしめす

たふとさよ

仰げば遠し

皇國の

紀元は二千

六百年

二

あを人民に

い照る日の

光あまねき

おほ八洲

春のさかりを

さく花の

薫ふがごとき

ゆたかさよ

仰げば遠し

皇國の

紀元は二千

六百年

三

大わたつみの

八潮路の

めぐり行きあふ

八 絃

日知のみ業

うけもちて

宇とおほはむ

かしこさよ

仰げば遠し

皇國の

紀元は二千

六百年

紀元二千六百年家庭奉祝の奨め

一、趣旨

光輝ある紀元二千六百年、菊花薫る秋十一月十日、長くも天皇 皇后兩陛下の行幸行啓を仰ぎ奉り、新装成れる宮城外苑に於てこの佳き年を奉祝すべき國家的式典の舉行せられますことは、洵に一大慶事であり、その盛觀思ふべきであります。世界の歴史あつて幾千歳、その間幾多の國家、民族が常に興亡盛衰を繰り返し來つた中に獨り我が國のみ、宏遠なる肇國以來、一君萬民の比類なき國體のもとに彌榮えに榮え参りましたことは、我等皇國民の限りなき榮譽であり響ふるなき歡喜であります。しかも今や、世界は擧げて一大轉換の途上であり、皇國又聖戰四年、未曾有の非常時局に直面し、興亞大業の貫遂を目指して國民一徳の總力を集注しつゝある秋であります。我等は茲に深く國體の眞義に徹し、建國の大精神を體認し、誓つて八絃一字の大理想を中外に顯揚せねばなりません。この宣誓、この決意を固むることこそ、曠古の盛典に一層の意義を加ふるものと信ずるのであります。來るべき吉辰には、かやうな心構へを以て、億兆臣民あけて心からなる慶祝の誠を捧げたいものと存じます。建國祭本部、茲に鑑る所あり、全國的奉祝の方途は、須らく各家庭の動員に如くものなしと信じ、敢て擲らず、左記家庭奉祝要項を提唱しその實施を囑望するに至つた次第であります。

翼くは、全國家庭擧げて、これに参加せられむことを

一、紀元二千六百年家庭奉祝要項

一、宮城遙拜 國民は心からなる慶祝の遙拜を致しませう。

二、神詣り

國民擧つて皇威宣揚を祈願し、銃後國民としての心の弛みを戒しめ、天業翼賛の誓ひを固めませう。

各自でお詣りする事は素より結構ですが、隣組、隣保班町内會、部落會、團體等に依る參拜も意義ある事と思ひます。

三、お祭り

各家庭では神棚や佛壇を淨め、お供へ物をして一家揃つて拜ませう。

四、お祝ひ

神佛に對しては飽くまで嚴肅にせねばなりません。その一方家庭のお祝ひは出来るだけ楽しいものに致しませう。

イ、時局柄贅澤は止めて各家庭夫々質素ながらも眞心こめたものを調製してお祝ひませう。

ロ、床の間に相應しい掛軸を懸け、菊の花を添へる等して一家揃つて楽しく過しませう。

ハ、次の時代を存負つて立つ子供胸にはつきりと日本精神を植ゑつける爲に日本の國柄や歴史のお話及び時局に對應する心構へ等を教へませう。

神勅、國歌、並に紀元二千六百年に相應しい字句を清書させませう。

教化大會 十月十三日はいふ迄もなく日蓮聖人の滅に非らざる滅を現じ給ふた聖日に相當するので、かゝる機会こそ最も有意義に大聖人の御精神を昂揚致すべきである、殊に曩日三國同盟成立に就て、大詔渙發の大事もあり、此際一段と立正安國の深義を敷演すべく本部に於て午後二時から教化大會を開催した。

初めに大衆と共に森嚴莊重な法味が御寶前に捧げられ、大聖人第六百五十九年忌と共に日支事變陣歿諸靈位の追福回向並に皇軍武運長久の祈りに一同は至誠を披瀝したのである。引續いて講演會に移つて、開會の辭は磯部常任理事から三國「同盟と立正安國」に就ての意義並に欽傍神域に於ける全國教化大會の報告と共に宗教心啓發の緊要なことを述べ、次で上田理事長は經濟界の時代の動向に關して自らの體驗から將來に對する覺悟を繰説し、和賀義見師は大聖人が元寇來に國民舉止に迷へるの時、「日蓮は日本の大難を拂ひ國をたもつべき柱なり」と毅然叱呼された護法愛國の至誠こそ今の時大に學ぶべきであると新體制に對する態度を直裁簡明に論及

興亞奉公日 毎月一日朝六時より本部に於ては當日を意義あらしむべく努めて居る、殊に十月一日は 三國同盟の御詔書を捧讀して、御聖意の有難いことを共々感佩して、お互一層の滅私奉公を御寶前に誓つた。

故小峰信士を追憶して

生きておはせしには、心には思はねども一月に一度や一年に一度は問ひしかども、死し給ひてより後初七日・二七日より乃至第三年まで、人目の事なれば形の如く問ひ訪ひ候へども、其より十三年四千餘日の間かきたえ問ふ人はなし、生きておはせし時は、一日片時のわかれをば千萬日とこそ思ひしかども、十三年四千餘日の程つや／＼おとづれなし、如何にさかまほしくましますらん。

日蓮聖人の刑部抄に拜するこの一節によるも、昔も今も人情には變りなく、去るもの日に疎しであるその中に於て、信心の強盛なる人人には、日の経るがまゝに彌々追慕の念の増すこそ不思議である。

日本橋小峰家に於ては、先代秋太郎信士の第十三回忌追悼

し、五時過玄題齊唱散會した。

同師會 本多上人中心に組織された本會は、其後僧侶の會員相續いて遷化を見たが、お互は益々其誓約を遵守して萬障を排し精進を勵んで時々相會して隔意ないお互の研鑽の結果を發表しつ、或は討議しつ熱烈に求道心の向上を圖り、且つ又時代對策を練りつゝある。十月十三日午前十時本部會議室で開催、午後二時近く迄全員極めて眞剣な懇談を交へ多大の成果を齎らしたことは法慶至極と思ふ。

信行會 毎週月曜朝六時十分より勤行と法話に隨喜參加の方方は、漸く日出も遅い高秋、星を戴いて、家を出ることになり、夏分よりは一入努力を要するにも拘はらず、遠く浦和或は杉並や豊島長崎邊から出かけられる精進振りには自ら合掌す、血潮の溢る若い人々に示されるこの信心こそは國家の爲めどれ程の強味か謂ひ盡し難い、有難いことである、一段と強化致したいものである。

御書講座 日蓮聖人の報恩鈔に就て毎週火曜日晚、小林一郎先生が極めて御多用中にも萬障をおさしくり下さつて御口述をたまわる事、殊に彌々交通不便をものともせず御出講下さるの一種の滅私奉公ともいへやうが恐縮に堪えない、併しかゝる折柄の聽法こそ眞に感激に充され法悦に浴するものである、どうか一人も多く來聽されたく思ふ。

會を其詳月御命日の十月二日、新福井町報恩閣に営まれたのであつた。小西日喜師から護法院淨明日秋信士の法號を授與された通り、全く小西師を輔け在家の菩薩として御夫妻揃つて終始一貫した信仰中心の作業に勤勉力行しつゝ同業者中に於ても群を抜いた鮮かさであつた。大正十三年九月、大震災の第一周年に際し、文書傳道の緊要なるを叫んで小西師指導の許に顯本宗學研究會の機關誌『師子吼』後『渴仰』といふ小冊子、發行人小峰秋太郎で毎月一回發行されたが、夫れに就て例月精神的にも物質上にも豊かでない一家を犠牲にして奉仕されたものであつた。それが爲に世間では兎や角と問題にする程夫婦揃つて眞剣に精進し、小西師と數々徹夜執筆されたことを見聞し、珍らしい一家もあるものだと思つてゐた。餘程果報のよい若夫婦であつたのか、或は小西師の化導の宜しかつたのか、私には解らぬが小峰信士の誓願が斯様に記されてゐたことを見た。

一、吾人は働く事を法華經とも、日蓮主義とも思惟し、働く者也。

一、吾人は法華經に南無し、法華の行者日蓮大聖人を慕ひまつり、年中無休喜々として働く者也。

一、吾人は自己の暗き理智の爲に、哀れ荒怠に流れ、溺死せんとする者あらば、身や溺るゝとも、救はんが爲に働くもの也。

一、吾人は清く正しく働く事を以て、勿體なくも吾人等の爲に御難行を踏破せられたる祖師に對し奉り、御恩謝徳、息の根の通はん程は、南無妙法蓮華經の五字七字を口唱し、高唱しつゝ専心働く者也。

一、吾人は濁世の今、清淨の汗涙一滴なりとも、偏身より流さるゝ者の日夜加はらん事に依て、愈々強盛に一

天の正義の下に働く者也。

一、吾人は右誓願して働く者也。

如何にも努力家であつた事がよく窺はれる。而かもその奮闘が普通世間的の營利目的の爲でないことは誓願に依つて知られる通り、相對的には感謝報恩に發し、絕對的には歸依三寶であつた。この尊い功德果徳が今日豊子未亡人をして益々道念堅固に、現世の荒浪を悠々自適、乗切つて行かれるのであらうと思ふ。全く信仰は力である、信仰は光である、信仰は杖柱である、信仰は大地であり、信仰は佛智を得ることである。常樂我淨の淨妙身を成ずること疑ひない。「師子吼」の十二月號に「成佛なし得るや」といふ題で小峰信士の一文、其の終りに、

我等の信仰——目的が已に成佛にあり人格の向上——完成であり、併せて國家人類の平和建設である以上、吾等は佛子としての理想の實現に努力しないでどうする。實の山に入つて懐ろ手してゐて何が得らるゝか？

佛に成る道は必ず身命を捨つるほどの事ありてこそ佛にはなり候はめ。

極樂——地上の天國、成佛——人格の完成、が吾等の目的——信仰であるならば、一番粉骨碎身せずばなるまい。

多くの人が一片のパンに攷々としてゐる様に、併し乍ら又次の金言に鍛はれねばならぬ。

「浅きを去つて深きに就くは丈夫の心なり」唱哉丈夫、何ぞ衣食の爲に乃ち是の如くなるに至る。汝、今此寶を以てほつする所にかへよ。

南無妙法蓮華經

と、述べられて居る。更に小峰信士は又多趣味の方であつた、非常に忙しい中から俳句にも堪能であり、短吟、俳畫等この方面に相當天才を發揮されてゐた。病臥の數ヶ月前御夫妻揃つて身延詣をされた時の感想にこんながある。

日盛の鶯聞きぬ箱根山。

夏際や青田の空を迂る如く。

晴れにけり夏の御山にかゝる頃。

身延山昔なからの夜霧かな。

御舍利や昔を今日に夏寒し。

小峰信士の俳句は宗教味の多分に含まれた教句である處に一つの特長があるらしい。或る年の寒行會一月卅日宗學會に

辿り着いて讀める、

寒行や黎明の雪をまつしぐら。

その俳名を洗耳といひ、短吟には不粹と號してこんながある。

人の花……逡巡か貢く味噌醤油。

同……いつ／＼迄も處女であれ。

倦る……手折つた花を捨るくせ。

同……花から花へ移る蝶。

昭和三年の秋、横濱根岸の海岸に靜養中途に再起の望み失せたことを自覺して仰臥のまゝ枕紙に鉛筆のあとも鮮かに最後の心を述べられたのが、

眼を閉て求むるものや秋のこゑ。

秋のこゑは悲しい虫の聲では無論あるまい。即ち十日ばかり先きの 祖師御會式のアノ熱烈な、眞剣な、立正安國の叫び、南無妙法蓮華經であること推するに難くない。先師田志さんが詠める、

題目に我世はありぬ秋の風。

思ひ合せて感慨は無量である。噫、四十一歳の働き盛りで逝かれてしまつた小峰信士は、モ一働くだけ働きて盡して靈山に往詣されたのであらう。世間には八十九十までも生き永らへて而かも短命と謂はるべき人もあれば、此の小峰信士のやうに四十臺で逝かれても實には長命だといはれる人もある。

要はその人の善根功德を積んだか否によるものであらう。こゝろ考へると空しく毎日を過すことは出来なくなる。志ある者各後生を懼ると聖人は仰せられたが、私共將來のことに想ひ及ぶ時、慄然として冷汗を覚える。地獄や極樂などは昔しの善男善女へのおどし文句でソツナものが有つてたまるか馬鹿馬鹿しいと現代人は一笑に附し去るが、本多上人は、

地獄極樂は確かに實在のものに候、されど其の實在の有様、及實在の理義に於ては、獨り法華經の本國土の妙旨に至らずば根底的説明をなし得ざるものに候、是れ最も高等精要の教義に屬し候へば、日蓮聖人の觀心本尊抄の「今本時の娑婆世界は三災を離れ、四劫を出たる常住の淨土なり」の前後の聖判、審思熟慮被成度、尙本宗綱要中、所期國土の章下御覽有之候へば、會得相成可申候、目連尊者の母餓鬼道に墮ちたりし事も十界事常住の教義を知り、目連尊者神通の作用を知り、而して佛陀が救済の方法を教ふるに當り、功德を積みて之を回向すべき事を以てせられたるを思はば、轉た佛教の大理想に感ずるの外なき事と存候。

大聖、先哲の生命にかけての貴き教戒を、自らの淺識憶測を以て批判ケ間敷言論する程卑しきものはない、全く大馬鹿の標本である。因果を信ぜず、佛様の實在を信ぜられないものは罪業深重の故、果報の獨ない爲と仰せられて居る。幸にもこの妙法蓮華經の信仰を得たことは『梵天帝釋四大天王轉輪聖王の家に生れて、三界四天を讓られて人天四衆に恭敬せられんよりも有難い』と、日蓮聖人の歎かれた意味合を確かり把りしめたものである。惟へば小峰信士は幸福なお方であつた、それは豊子丈夫の一貫した強信の日常を想到しても……『弱き者、汝の名は女なり』といふやうなことは信仰のないヘナ文士の癡言である、『大乘を信する者は、女人と雖も丈夫なり』と、御佛は讚歎遊ばしてゐるではないか。菩薩には男女の區別はない。

『天晴れぬれば地明かなり、法華を識る者は世法を得べき歟』と聖人は仰せられたが、現代は世法に一生懸命であつて、法華を忘れて居りはせないか、それでは天晴れず地上亦常闇である。今こそ小峰信士の精進された此の大白法、妙法蓮華經の五字を人々に興ふべき絶好の時機であるまいか。たとへ一人を勧めて信心に入らしめても、そこに眞の追善回向の深義が成り立つであらう。況んや二人三人五人十人と展轉するに於てをやである。私共及ぶ限りの力を竭して護法院靈也の淨願に添ふべく精進致し以つて其御回向の一端に擬したいと

思ふ。殊に豊子未亡人から、本團の教化資金中へ全壹封を御喜納下さつた事を感謝し、其お志の成滿を佛祖三寶に合掌唱題致しつ攝筆する。

南無妙法蓮華經

——一五、一〇、三、磯部記——

立正青年團報

伊東行 酒悅立正青年團、東運立正青年團の十月の第一日曜日に於ける修養日は、伊豆伊東に於ける日蓮大聖人の御遺跡を見學することだつた。

同日午前六時四十分、一同は、東京驛を出發することにした。前の日に、天氣が曇つてゐたので、何うかと思つて心配したが、案に相違して秋晴れの素張りらしい天氣だつた。

田圃の稻は、すつかり色づいてゐた。小田原から熱海にかけて汽車は海岸の切崖の上を走る。車窓から見下すとすぐ足許に波が寄せてゐる。海は大變靜かだつた。波が寄せてゐるといふよりもその儘淀んでゐるといつた方がよい。かうした海の景色といふものは、なかなか見られるものではない。

熱海から伊東迄、汽車は海岸の縁を走る。こんなには岸の近くを走るといふ汽車も珍らしい、海岸には型のよい大きな自然石が無數にころがつてゐる。それ等を見てゐると、その妙實に限りないものがある。直ぐ目の前に初島が手に取るやうに見える。海は不相變靜かだ。

汽車が、トンネルを抜けたら靜かな漁村を通つたりして伊東へ着いたのは、九時三十五分、そこから一同は太鼓を打ち鳴らしながら妙隆寺へ參詣した。妙隆寺は、願本法華宗の御寺である。生憎住職は沼津へ行かれ御留守であつたが、其處で一同お勤めしてから、磯部先生は日蓮聖人と伊東に就て有難い法話をされた。丁度お晝となつたので一同はこゝで食事すませたが、そのお晝のうまさ加減は忘れられない。

妙隆寺から先の豫定は、日蓮大聖人が、三十日餘りも居られたといふ川奈の御岩屋を拜觀し、其處から日蓮大聖人が、鎌倉の方から小さい舟で流され上げられたといふ日蓮岬の廻岩を拜觀、再び伊東へ戻るといふ豫定で、其の間を時間の關係上バスに乗つて行く積りにしてゐた。

ところが時局柄、バスの臺数は減る、團體取扱は絶體にやらないといふので困つてしまつた。今更豫定を變へる譯にも行かないし、といつて全コースを徒歩で行くことも出来ずはとほと弱つたが、別の普通の自動車屋さんに頼んでやつと六臺貸して貰ふ様うにした。驛から妙隆寺迄、太鼓を叩いて歩いて行つたのを向ふの方でも知つてゐて呉れたので、寧ろ自動車屋さんの方で大變に同情をして呉れた。或は普通の遊山客なら自動車を一時に六臺も借りるといふ事は出来なかつたかも知れない。非常に有難いと思つた。

妙隆寺をお暇乞ひして、愈々自動車で川奈へ行くことにな

つた。自動車に乗る前に、天然記念物として、珍らしい温泉中の魚を見物した。幾つかの池に滾々と温泉が湧き出てゐるその中に斑點のある六七寸計りの藍色をした魚が群をなして泳いでゐる。美しい、珍魚だつた。

川奈へ行くには、山間の凹凸の激しい山路を通つて、右に左に、上に下に搖られながら自動車は走つた。東京のアスファルトの道路とは大變な違いだ。しかし新うした山路はまた何となく懐かしいものだ。父母の居る故郷の山路でも走つてゐるやうで、かへつてこの方が有難い感じだつた。

山には、澤山の柿が眞赤に熟して、枝も折れるばかりに垂れ下つてゐた。實に夥しい柿の實だ。書き洩したが、お晝に妙隆寺で、おいしい、おいしいと云つて柿を頂いたが、その柿がこれだらう。

自動車は、山の頂上に近い處を走つてゐる。右手を見ると、丁度富士山のやうな形をした美しい山が見えた。何といふ山か、運轉手さんへ尋ねたら、「小室富士」といふことだつた。この山は、もと富士山と兄弟だつたさうだが、親不孝の罪で、こゝへ追ひやられたといふ事だつた。美しい傳説だ。何時もこの山を仰ぎ、日蓮大聖人の御遺跡であるこの地方の人々の中には親不孝者はいだらうと心中微笑と、自然の崇高美と傳説の美しさにうたれた。

山頂に出ると、川奈が足許に見える。海の遠くの方に大島

がくつきりと望まれる。その山路を幾度も幾度も曲つて、自動車は川奈の直ぐ御窟屋の前に停つた。

お窟屋の前で、一同はお題目を唱えた。このところで、日蓮大聖人は何ういふ風にお暮しなされたかといふ日蓮聖人の御日常を、磯部先生が彌三郎御書を拜讀して詳しく御説明下された。自然と涙が下るやうな感激を覚えた。お窟屋は、全く粗末な身をお入れになる位の狭い小さい處のやうだつた。現在は其前に一寸した建物があるが、本當に日蓮大聖人がお住ひになられた御窟屋といふか物置きといふかそれは雨露をしのぐにも不十分だつたに違ひない。よく新ういつた所に三十餘日も居られたものだといふ有難く感激で胸一パイになつた。

御窟屋の拜觀を終へたので、こゝから篠見が岬の蓮著寺へ向つた。途中山の中腹の船守彌三郎の屋敷跡だつた蓮慶寺に御参りした。こゝでも磯部先生の御説明があつて、日蓮聖人をおかくまひした船守彌三郎の不朽の功績と名前は萬代不易だと云ふ御話があつた。お寺の横の小高い處には、彌三郎夫婦のお墓があり、其外未だに上原家のお墓が立ち並んでゐる上原彌三郎の善根が、子孫にいつまでも續き、また我々を勵まして下さる。有難いことだと思つた。

此處から篠見が岬の蓮著寺へ行く山路は、險しかつた。その山頂に廣いゴルフリンクがあつて、緑の美しい芝が見えた。

つた。そして松本君が丹念に寫眞を寫した。蓮著寺には約四十分程も遊んだらうか、海岸の岩の上に、芝生の上に思ひ思ひに休んだ。

蓮著寺の拜觀も済ませたので、自動車で最一度伊東へ戻ることにした。歸りは縣道へ出た爲めに早かつた。

伊東の町に降りて、一同温泉に浸り、夕餉を済まして汽車へ乗つた時は、もうすつかり夜に入つてゐた。汽車の中で、我々は、今日一日の清遊の喜びに浸り續けた。

金城記

團費誌料維持費及寄附金額收

(自九月二十一日至十月二十日)

一金拾圓也	東京	沼部彌太郎殿
一金貳圓五拾錢也	同	原むめ殿
一金貳圓五拾錢也	愛知縣	藤田清太郎殿
一金貳圓貳拾錢也	千葉縣	廣部乾山殿
一金貳圓五拾錢也	東京	須藤仙吉殿
一金拾貳圓五拾錢也	同	酒悅商店殿
一金五拾圓也	同	小峰豊子殿
一金參圓也	同	伊藤ナヲ殿

その横に廣壯なホテルがあるのが何か珍らしかつた。自動車は山の途中から急にまた細い若草茂る山路に入つたが、これは自動車屋さんのサービスタといふことだつた。縣道へ出れば容易に蓮著寺へ行けるところを變化の多い、景色のよい秋の山の中を案内しやうといふのである。まことに我々にとつては有難い話だつたが、山路があんまり険しいので、二臺目の自動車は遂にエンジンが焼けたので、用心のためストップした。自動車が停つたので一同暫く降りることにした。

樹々はまだ色づいてないが、秋の山の中といふものは爽涼として心地がよかつた。誰か木々の茂みの中にアケビを見つけた。外にもアケビを見つけた人が數人居たやうだつた。我々の乗つてゐる自動車の中にも五つ六つ實のなつたアケビが運轉臺に飾られてあつた。

篠見が岬は、流石に寂しい處だつた。現在でも川奈に參詣する人は多いが、此處迄來るといふ人はさう多くないとのことだつた。蓮著寺といふお寺のお名前は、日蓮聖人が着けられたといふことだつたが、實によい處だ。前が直ぐ海になつてゐて、大きな石が海岸を埋めて居る。大きな松の木があつて、その松の木の間から潮加減により廻岩が見えるといふことだつた。ところが日蓮聖人がお上りになつた廻岩は現在の廻岩とは位置が違ふとの事だつた。

一同蓮著寺に參詣、此處でも磯部先生の御懇篤な御話があ

一金貳圓五拾錢也	久留米	平岡越郎殿
一金五圓也	盛岡	小林茂殿
一金拾圓也	久留米	鶴澤泰温殿
一金四圓四拾錢也	長崎	前田瑞穂殿
一金五圓也	宇都宮	横堀龍男殿
一金貳圓五拾錢也	東京	森千代殿
一金貳圓貳拾錢也	同	井上知孝殿
一金貳圓貳拾錢也	横濱	荒木蓮成殿
一金貳圓五拾錢也	東京	馬田平藏殿
一金貳圓貳拾錢也	兵庫縣	眞田文雄殿
一金五圓也	横濱	京田爲太郎殿
一金貳圓五拾錢也	同	日山與三郎殿
一金貳圓貳拾錢也	廣島	堀尾四郎殿

右爲護法態々御送金戴き難有入帳仕候 一々領收證を差上げべき筈に御座候得共節約上昨勝手略仕候間御諒承たまはり度候

財團法人 統一圓會計

法滅盡經

第十二套の五

僧祐錄中失譯經人名今附宋錄

聞きしことは是の如し、一時、佛、拘夷那竭國に在ましき。
 如來、三月當に般涅槃すべしと、佛、阿難に告げたまはく、吾れ涅槃の後、法の滅せんと欲する時、五逆濁世の魔道興盛し、魔は沙門と作りて吾が道を壞亂せん、俗の衣裳を著け、袈裟五色の服を樂好し、酒を飲み、肉を喰ひ、殺生して味を貪り、慈心有ること無く、更に相憎嫉せん。

奴は比丘と爲り、婢は比丘尼と爲りて道德有ること無し。姪姪濁亂し、男女を別たず、道をして薄淡ならしむるは皆斯の輩に由る。

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	特價	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	送料共	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		全	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要		全	金貳圓九拾錢
真理の基礎に樹つ佛教の信仰		全	金拾五錢
法華經要品		全	金五拾錢
日生上人レコード(四面)		全	金參圓廿五錢
本尊意識に就て		全	金貳拾錢
釋尊の八相成道		全	金貳拾錢
法華經の心髓		全	金壹圓五拾錢
禮部講事編輯		特價	金壹圓七拾錢
本多日生上人		送料共	金拾錢
勳行作法		全	金壹圓
佛教の心髓		全	金壹圓
河合珍明著		送料共	金壹圓
皇道と日蓮主義		全	金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ七
 財團法人 統一出版部
 振替東京九四二〇番

統一定價
 一冊 金貳拾錢 送料壹錢
 半ヶ年 金壹圓貳拾錢
 一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意
 ▲御申込ハ總テ前金ノ事
 ▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
 ▲御購居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御通知ノ事

昭和十五年十月二十七日印刷納本
 昭和十五年十一月一日發行
 (第五百四十八號)

不許複製
 東京市小石川區音羽町六ノ十七
 編輯部 磯部滿事
 發行人 磯部英二
 印刷所 野島好文堂印刷所
 電話牛込六九六番

發行所 財團法人 統一出版部
 東京市小石川區音羽町六ノ十七
 電話牛込五三三六番
 振替東京九四二〇番



次 目

公民教養と菩薩行(下)	本多日生
開目 鈔 講話(第卅七講)	小林一郎
法華經を信ずる所以	中村清一
新體制と吾人の世界觀	磯部滿事
懷願五十年	中村謙藏
隨想	
日蓮門下新體制への直言	寬 義 章
紀元二千六百年奉祝歌	
記事	

○本部團報 ○團費誌料維持費及寄附金領收

號月二十年五十四第

第三十三年十二月二十四日第三號 第五百四十八號 第四十五年十一月號